

第3章 発掘調査のまとめ

第1節 稲荷山古墳の墳丘・周堀・造出しについて

1 墳丘

現存する後円部には葺石を一切伴っていなかった。また、このことと関係して墳丘盛土の流れ落ちが著しく、精細なコンタ図を以てしても段築の様子が読み取れない。トレンチを設定して墳丘調査を行ったところ、墳丘主軸線上に設けた9年度4区において、標高22m地点に幅2.2mの中段テラス跡が遺存していた。これに直交して右側に設けた9年度2区では中段テラスは幅は2.2mで共通するが、標高が21.2mで、少し下がっていた。両トレンチとも墳丘盛土の流失があり、埴輪列は残存していなかった。一応、このことから墳丘が2段築成であったことは確認できた。

また、後円部東側には大規模な墳丘の崩落痕があり、墳裾も外側に張り出して正円形をなしていない。昭和43年度の調査着手以前から存在していたものであるが、9年度2区の調査所見によれば、F.A.降下前の5世紀末ころに大規模な地滑りが発生して、内堀の堀底浚いと、埴輪の再設置を含めた墳丘の応急処置（築造当初の姿には復旧していない）が行われたと推定され、さらに6世紀代にも地滑りがあって、墳丘の埴輪列の再設置と中堤上の破損した円筒埴輪の交換が行われた可能性が考えられた。

墳丘基壇部は後円部では確認できなかったが、わずかに9年度5区においてくびれ部付近の前方部で幅3m、上面レベル16.3mとなる基壇部が確認された。古墳の規模は主軸長が120mあり、後円部は不整円形であるが、墳丘基壇部の存在を想定すると、ほぼ直径60mとなり、大山古墳（仁徳陵）の設計型を採用していることが確認された。また、前方部幅は80mである。

2 造出し

造出しは後円部の西側、くびれ部近くに設けられている。平面形は隅丸方形で幅は16.8mを測る。先端部は盛土・版築によって奥行き2mの平坦面が造られていた。周囲から出土した遺物によって、円筒埴輪で区画され、須恵器と土師器から成る供献土器が置かれていたとみられる。

3 周堀・周堤帯

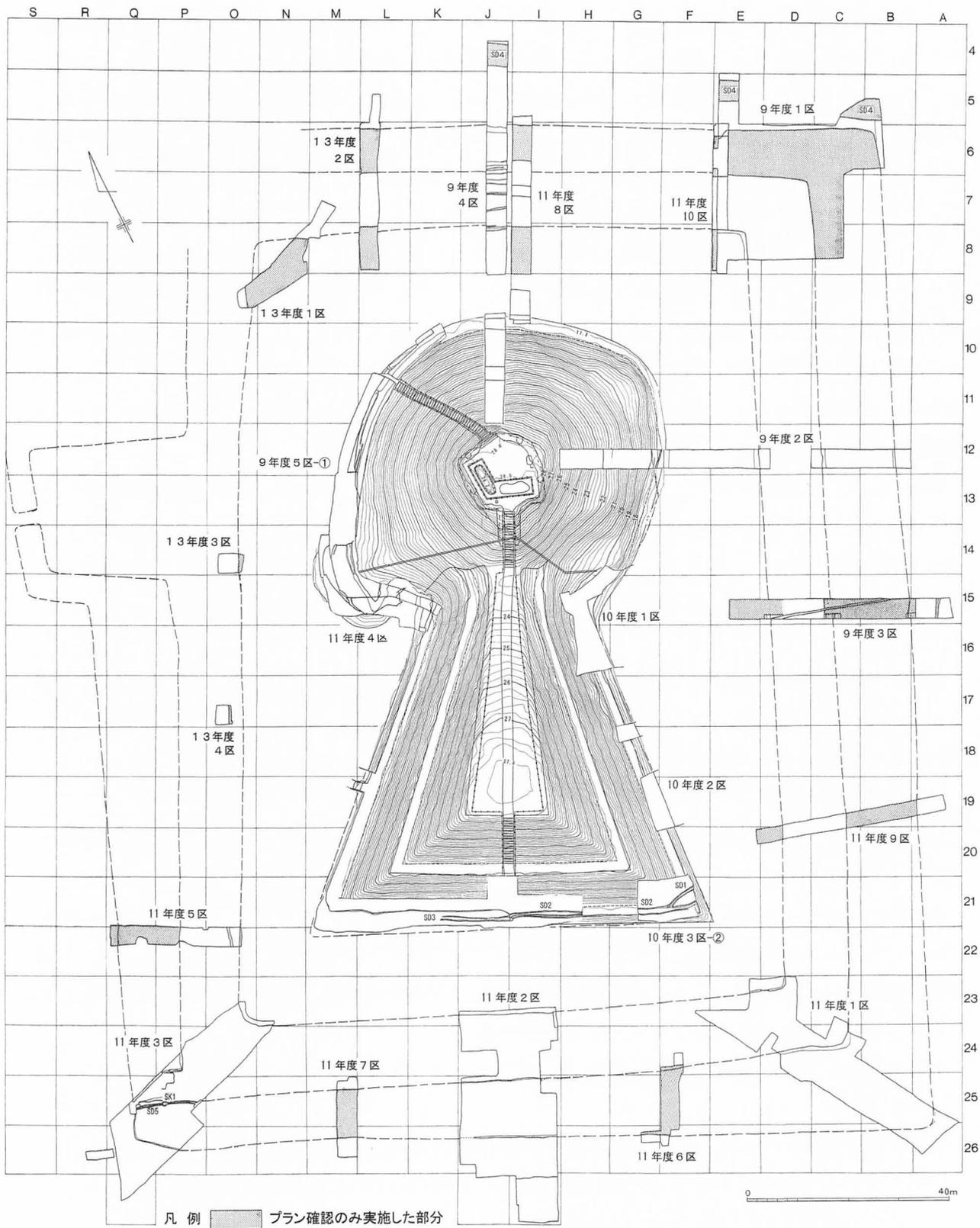
長方形の二重周堀を伴い、中堤と外堤が存在する。両者とも盛土を有し、直近周堀内の埴輪出土状態から埴輪列を設けていたとみられる。外堤の盛土幅は9年度3区で4.56mが残存していた。

兆域は外堀の外側での計測値で幅160m、長さ200mである。内堀の底部標高は後円部の東側では15.1～15.6m、後円部の西側から前方部の周囲では15.9m～16.2m前後であった。また、外堀底部標高は15.4～16.2mであった。墳丘裾部の断ち割り得た旧表土上面の標高17.2m前後から計測すると、掘削深度は1.0～2.1mあったことが分かる。

なお、今回、外堀の左手前隅角付近に地山掘り残しによるブリッジの存在が確認された。

4 石材

後円部主軸線上の外堀底部で1辺1mを超える石材が検出された。主体部の構築に用いる目的で搬入中に落下して回収されなかった可能性が高い。初葬の中心主体部が竪穴式石室、石槨または組合式長持形石棺などのいずれかとなる可能性を示唆する発見といえる。



第83図 稲荷山古墳復原模式図

第2節 稲荷山古墳の埴輪と提起される諸問題

1 問題の所在

稲荷山古墳出土の形象と円筒を合わせた埴輪総体は極めてバラエティーに富み、型式学的に見た場合、同一の集団が一定の技法に従っていちどきに製作した物（同一型式）でないことを示している。円筒埴輪は大分類では4類に分かれ、段構成等の違いを指標とする小分類では12類に分かれ、さらに朝顔形埴輪が各大分類に伴っているので合計で15分類されることになる。4つの大分類こそが工人集団の相違を示している可能性が高いのであるが、型式学的に見て、なお時間差も存在するものと思われた。（注1）しかし、同一時期に保守的な集団と革新的な複数の集団が併存し、常に新古の両要素が絡み合いながら型式進化するとすれば、同一時期の所産でないと証明することも容易ではない。

証明の方法としては、埴輪を掘り据えるための溝やピットの切り合い関係から新旧関係が決定されれば簡単だが、稲荷山古墳では現位置に留まる埴輪はほとんどなく、周堀内に転落した状態であった。そこで出土状態の記録を活かすために、平面ドット図と立面ドット図の双方を作製し、接合関係を線で結んでみた。これによって当該資料の原位置を推定し、個体相互の周堀への転落時期の先後関係を知ることが可能となる。しかし、新しいものが先に転落し、古いものが後から転落する逆転現象も生じないとは限らない。

決定的な方法に苦慮した末に、稲荷山古墳と埼玉古墳群の各古墳の埴輪資料のクロスチェックを試みた。埼玉古墳群では各世代の首長の墓が継続して築造されているため、S.D.法の連続編年軸の中に資料を相対的に位置づけることが可能になるからである。なお、製作者集団の系統の問題を解決するために、胎土分析結果を活用し、各埴輪窯調査者の意見を求めた。

2 埼玉古墳群の円筒埴輪編年（付図2）

第1期

埼玉古墳群における埴輪の出現期であり、最古の前方後円墳である稲荷山古墳に樹立された最初の埴輪A類が該当する。3条凸帯の小型品（3）と5条凸帯の中型品（2）、6条凸帯の大型品（1）がある。大型品は寸胴な第Ⅰ器形を採り、各段の長さは均等である。口縁端部がわずかに外反することを特徴としている。凸帯の断面形は側面幅の狭い台形（台a・b）で突出度が高く、調整も丁寧である。外面調整は第1次調整のタテハケで終了するものが多いが、一部に第2次調整B種ヨコハケを施すものがある。透孔は半円形に限られる。胎土は共通しており、鉄分の含有が極度に少ないため乳白色の色調を呈するものが多い。ただし底部を除く外面と口縁部内側に第二酸化鉄を原料とする赤色彩色が施されている。焼成は軟質なものが多く、断面が黒色を呈するものが目立つ。

行田市内の利根川沿岸部には、とやま古墳（注2）、大稲荷1号墳（注3）など乳白色で軟質な円筒埴輪で赤色彩色を施す資料群があり、前者にはB種ヨコハケを伴う個体がある。稲荷山古墳A類とほぼ同時期の製品であろう。大稲荷1号墳からはTK23型式の須恵器甕が出土している。

なお、鴻巣市新屋敷遺跡の帆立貝形古墳である第60号墳出土の2条凸帯円筒埴輪は円形透孔であるが、例外的に半円形透孔を持つ1個体（4）がある（注4）。外面最上段と口縁内側の狭い範囲に

赤色彩色が施されている。稲荷山古墳の3条凸帯品と比較すると、底部径の矮小化が看取され、凸帯断面の形状が幅の広い台形で側面がくぼむ点は新しい要素である。この古墳では堀底から0.6mほど浮いた状態で榛名山二ッ岳噴出火山灰(F.A.)が堆積している。また供献された須恵器に陶邑編年TK23からTK47型式の甗と高坏がある。半円形透孔を伴う小型円筒埴輪(5)は東松山市桜山埴輪窯跡群1～5号窯灰原からも出土している(注5)。

朝顔形埴輪について附言すると、稲荷山古墳A3類に伴う朝顔形円筒埴輪(付図3-1～4)は口縁部中間に明瞭な段を有しており、擬口縁技法と対応している。凸帯は接合部の補強を兼ねており、断面形台形(台a・b)、頸部の凸帯は断面形三角形である。肩部は半球状を呈する。口縁部は水平に大きく開く。

第1期の年代は金錯銘鉄剣とは直接関係なく、未発見の中心主体部(注6)の時期に相当するものと思われ、周堀のかなり埋まった段階で榛名山二ッ岳噴出火山灰F.A.が堆積している(注7)こととB種ヨコハケの残存から、須恵器でいえばTK23併行期となり、5世紀後葉の早い時期に比定できよう。ただし主体部の発掘調査によって時期が修正または限定されることが予想される。

なお、A類円筒埴輪の祖型として太田茶臼山古墳(継体天皇陵)の東側くびれ部から出土した半円形透孔を持つ円筒埴輪と肩部に銀杏葉形の線刻文のある朝顔形円筒埴輪(P162参照・注8・9)はその有力な候補となろう。円筒埴輪は口径が43cmで、口径が42cm前後のA2類(実測図番号39)と法量が近似し、寸胴な体部と僅かに外反して開く口縁部からなる器形もよく似ている。凸帯は断面台形で側面が窪み、側面幅が狭い台形凸帯となるA類とは少し異なっている。また透孔はひとしく半円形であるが、上から2段目に穿孔されており、3段目となるA類と位置が異なっている。口縁部を除いて2次調整のBc種ヨコハケ(注10)が施されているので、B種ヨコハケの出現率の少ない稲荷山古墳A類は相対的に少し後出するものと考えられる。朝顔形円筒埴輪は口径が66cmあり、これまたA3類朝顔形円筒埴輪の口径60～67cmに近似している。口縁部に明瞭な段を持ち、擬口縁技法が採用されていること、頸部に断面三角形の凸帯を巡らすこと、肩部にドーム状の丸みを帯びることなど共通点が多く、全体の器形も朝顔形円筒埴輪編年図に示した3によく似ている。ただし、2次調整のヨコハケが全面に及ぶ点や円形透孔が穿たれる点は相違点であり、稲荷山古墳A3類朝顔形円筒埴輪の方が相対的に新しいものと考えられる。

太田茶臼山古墳の当該資料は川西Ⅳ期では例外的な半円形透孔の残存や銀杏葉形の線刻文の保有から関東地方出身埴輪工人の関与を想起させる。半円形透孔は武蔵・上野・下野では5世紀後半から顕在化し6世紀前半まで残存する例がある。また銀杏葉形の線刻文は栃木県宇都宮市・壬生町周辺と群馬県西部、埼玉県中央部に分布が知られ(注11)、一方の透孔の脇に施文することを定則としており、二重と一重とがある(注12)。さらに、宇都宮塚山古墳の場合、透孔の脇に三重弧線を伴う例があり、太田茶臼山古墳からもこれが出土している(P162参照)。これらの事実は北関東の埴輪工人が徴発または技術研修のために大王家の埴輪生産に動員された可能性を示しており、製作地である高槻市新池遺跡から鬼高式土器が出土していること(注13)はその傍証となろう。このことは従来の埴輪の伝播イメージを塗り替えるものである。したがって稲荷山古墳のA類円筒埴輪は、太田茶臼山古墳の円筒埴輪製作に従事した北関東出身工人が、帰郷後に在地工人集団を製作指

導することによって出現した可能性がある。また、北関東の埴輪製作工人間には技術共有という広域なネットワークが存在していたと考えられる。なお、太田茶臼山古墳からはON46形式相当とされる須恵器短頸壺が出土しており、埴輪製作時期の一定点と考えられる。稲荷山古墳A類円筒の大多数から2次調整のヨコハケが消え、一部に残った事情は、その経過時間を示すものであり、年配の工人のみがヨコハケ技法を保持し続けていた可能性（注14）がある。それは一世代（20年から25年）を超えないものと推測される。陶器窯の型式に置き換えるとTK208もしくはTK23に対応し、後者の蓋然性が高いであろう。TK23の実年代は近年の研究では475年前後とする意見が有力である（注15）。稲荷山古墳の実年代に結びつくので慎重な検討が必要である。

第2期

最大の前方後円墳である二子山古墳（注16）の築造時期であり、二子山古墳に樹立された最初の埴輪であるA1a類（9）が該当する。推定復原の結果では器高110cm、口径60cmの6条凸帯超大型円筒埴輪になることが推測される。底部から徐々に開く第Ⅳ器形を採り、各段の長さはほぼ均等である。口縁部は端部が鉤状に外傾することを特徴としている。凸帯の断面形は幅のやや広い台形（台c・d）で突出度は高いが、調整はやや雑である。外面調整はナメハケで、第2次調整B種ヨコハケを伴うものはない。透孔は円形に限られる。胎土は共通しており、鉄分を多く含んだ赤褐色の色調を呈するものが多く、赤色彩色を施すものはない。厚手の作りで焼成は良好である。生出塚埴輪窯跡21・22号窯の埴輪捨場から出土した焼台（9の上半部）に例があり、窯は未発見だが、生出塚埴輪窯跡群の創業期に属するものである。

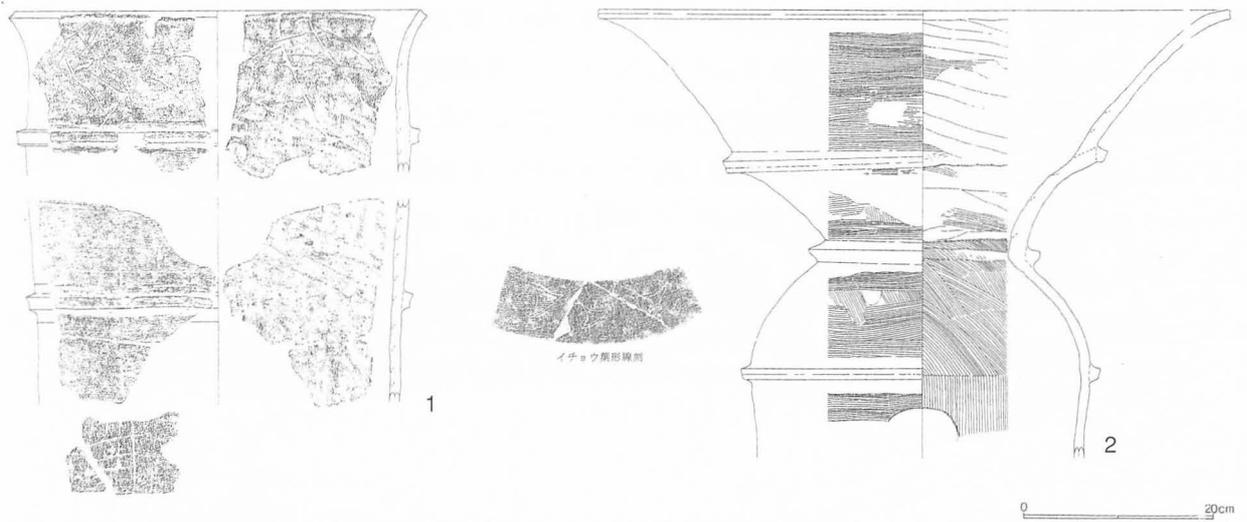
稲荷山古墳B1（11）・B2類（10）も胎土・焼成・色調から生出塚埴輪窯の製品である可能性がある（注17）。各段の長さは均等であり、台形状の凸帯、ハケ調整の特徴、透孔の形状などが12～17とよく似ている。稲荷山古墳B類の器形は下半部が直立し上半部が開く第Ⅲ器形であり、これらと異なっているが、器形の選択は法量の大小によるものであろう。生出塚33号窯出土の口径が30cm台後半のもの（13・14）はB2類と対応する可能性がある。

いっぽう、二子山古墳B類（6）は製作集団が異なっている。寸胴な第Ⅰ器形を採る推定6条凸帯の円筒埴輪で、方形透孔が伴うことを特徴としている。薄手の作りで浅黄橙褐色を呈し焼成は良好である。また胎土中に海綿骨針が肉眼で観察されるものがある。東松山市諏訪山7号周溝から全く同じ特徴を持つ同工品が出土している（注18）ので、比企地方の未知の窯で焼成され、二子山古墳に供給されたと見て誤りない。

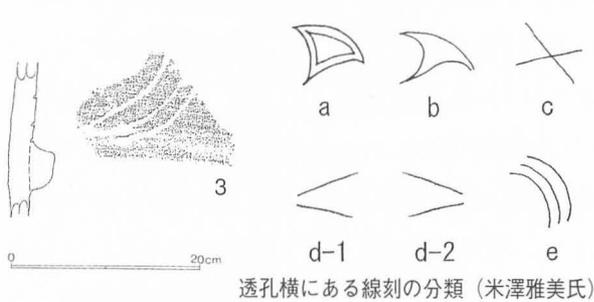
なお、愛宕山古墳C類（8）も方形透孔を持ち同一集団の製品である。出土量は少ないが、確実に伴うのであれば、愛宕山古墳（注19）の築造年代は二子山古墳とほぼ同時期となる。

4条凸帯以下の製品は生出塚33号窯に確例がある。埼玉2号墳の小型円筒（18）は生出塚33号窯から供給された可能性がある。

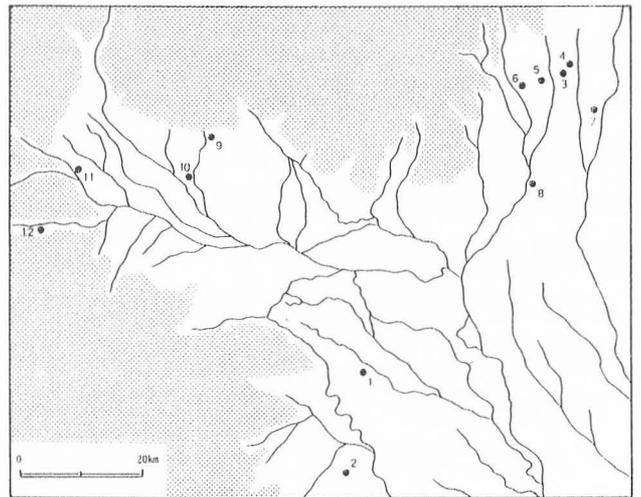
朝顔形埴輪について附言すると、稲荷山古墳B1類に伴う朝顔形円筒埴輪（付図3-9）は口縁部中間の段が弱いものの、擬口縁技法を有している。凸帯は装飾的なもので、断面形三角形である。口縁部の開き方はA3類と比較すると小さい。濃い赤褐色の焼き上がりから生出塚窯製品の可能性



稲荷古墳A類と近似する太田臼山古墳出土円筒埴輪 (1~3)



透孔横にある線刻の分類 (米澤雅美氏)



1. 新屋敷60号墳 2. 川越市小仙波4丁目例 3. 塚山古墳群 4. 本村2号墳
5. 浅間塚古墳 6. 壬生町羽生田例 7. 八龍塚古墳 8. 宮内2号墳 9. 勢多郡
新里村例 10. 波志江今宮4号墳 11. 高崎市剣崎例 12. 西大山1号墳

銀杏葉形線刻を持つ埴輪の分布 (大谷 徹氏)

銀杏葉形線刻を持つ埴輪の編年 (小野本 敦氏)

須恵器	栃木県	栃木県外
TK73 ~ TK216	浅間塚古墳 塚山古墳 笹塚古墳	大阪府藤井寺市土師の里遺跡 群馬県勢多郡新里村 大阪府茨木市太田茶臼山古墳
TK208 ~ TK23	塚山西古墳 宮内2号墳	
TK23 ~ TK47	塚山南古墳 八龍塚古墳 寺野東6号墳	群馬県高崎市剣崎 埼玉県新屋敷60号墳
MT15以降		埼玉県川越市小仙波4丁目 群馬県波志江今宮4号墳

第84図 稲荷山古墳円筒埴輪 A 類参考資料集成



写真1 太田茶臼山古墳出土円筒埴輪



写真2 太田茶臼山古墳出土朝顔形円筒埴輪

がある。

第2期の年代は二子山古墳の周堀底部に榛名山二ッ岳噴出火山灰F.A.が堆積（注20）していることから5世紀末頃に比定できよう。

第3期

日本最大の円墳である丸墓山古墳（注21）の築造時期であり、丸墓山古墳に樹立された最初の埴輪であるA2類（20）が該当する。復原口径50cmの超大型品で、寸胴な第1器形を採り、口縁部が他の段の2倍ほど長いことを特徴としている。凸帯断面形は側面の少しくぼむ台形で幅が狭い。生出塚埴輪窯跡群1号捨場から法量と器形の一致する焼台（22）が出土している。

該期と推定される生出塚埴輪窯跡の製品で4条凸帯中型品には32・33号窯2次炭化物層出土品（29）があり、埼玉古墳群の天祥寺裏古墳の円筒埴輪（28）と酷似していることから供給関係を推測できる。また5条凸帯品では鴻巣市新屋敷遺跡第25号墳出土の大型円筒埴輪（27）も生出塚産の可能性が高い（注22）。低位置凸帯埴輪の初見例である。二子山古墳A1a類とされる26も第1段が短い5条凸帯品で、透孔の配列方法が共通している。凸帯の断面形状はともに、M字形で比較的突出度の高いもの（Ma）である。同工品の可能性がある。

該期の生出塚産2条凸帯品（33）は36号窯から出土している。細身の第Ⅳ器形で第1段が長くなり始めている。口縁部は端部が屈曲して開くことを特徴としている。埼玉古墳群の埼玉5号墳の円筒埴輪（34）とよく似ており、供給関係が推測されている（注23）。埼玉5号墳からは陶邑編年第Ⅱ期初頭（MT15）の大形化した坏を模倣した土師器が出土している（注24）。

稲荷山古墳C類の円筒埴輪は橙褐色の焼き上がりで断面形M字形の凸帯を指標としている。5条凸帯のC2類（21）と推定6条凸帯のC1類（24・25）がある。器形やハケ調整からB類の延長線上に位置づけられるが、C2類はB2類より一回り小型の製作であり、とくに細身化が進行している。やや軟質な製品を含み、胎土も粗いので生出塚窯製品ではなさそうである。口縁部に△形のヘラ記号を伴う例（24）があり、二子山古墳C1類中のもの（23）はおそらく同工品である。この事実は稲荷山古墳の円筒埴輪中に二子山古墳築造以降に製作されたものが含まれていることを証明している。凸帯の形状から二子山古墳築造期ではなく、当該期まで下降すると推測する。

朝顔形埴輪について附言すると、稲荷山古墳C1類に伴う朝顔形円筒埴輪（付図3-11～13）は口縁部中間の段を消失している。凸帯は接合部の補強を兼ねており、断面形M字形（Mb）で、頸部の凸帯は断面形低三角形である。肩部は張りを失い、撫で肩になっている。

第3期の年代は、丸墓山古墳の墳丘直下旧表土中に榛名山二ッ岳噴出火山灰F.A.が堆積している（注25）ことと新屋敷遺跡第25号墳出土の大型円筒埴輪がF.A.降下後、間もない時期に廃棄されたもの（注26）であることから6世紀初頭、第1四半期頃に比定できよう。

第4期

中規模の前方後円墳である瓦塚古墳（注27～29）のA1類（40）とB類（37・38）とが該当する。A類は鮮やかな赤褐色、B類は浅黄橙色を呈するものが多い。ともに4条凸帯で口縁部が少し長く、他の段の長さはほぼ均等である。凸帯断面形はM字形で突出度は中程度である。A1類は鴻巣市新屋敷遺跡1号埴輪棺（41）に同工品があり、器形、法量などの各要素が酷似するだけでなく、ハケ原体の一致が確認されている（注30）。生出塚埴輪窯産として誤りないであろう。B類は海面骨針が肉眼で観察されるものが多く、比企産の可能性を考えている。口縁部内面には×状のヘラ記号を伴うものがある。このようにA1類とB類は異なった地域から供給され、工人集団の相違する製品でありながら、器形・貼り付け位置を含む凸帯の特徴・調整技法などの差異が小さい。このことは両者が同時期に製作されたことを示しているとともに、生出塚と比企では工人集団の製作技術や製作規範の差異が少ないことを反映しており、技術交流のあったことが推測できる。また法量や器高がほぼ一致することは発注者側の注文に従った結果と見ることができる。

なお、瓦塚古墳には5条凸帯と推定される大型の円筒埴輪A3類（35）が存在しており、A1・B類よりも古い特徴を有している。凸帯は断面形が幅の広い台形凸帯で、二子山A1b類（36）に近い特徴を持っている。橙色を呈し、焼成は堅緻である。個体数が極めて限られているため、標準的な埴輪とは異なるものであろう。

該期の生出塚産の円筒埴輪を通観する。生出塚2号墳の円筒埴輪（39）は4条凸帯で、瓦塚古墳の円筒埴輪を器形もそのままにスケールダウンしたものとって良い。同墳には3条凸帯の円筒埴輪（43）が少量含まれている。口縁部が伸長化していながら、底部は中間段と同じ長さを保っている。このことは3条凸帯品ではいまだ底部の伸長化が始まっていないことを示している。いっぽう2条凸帯品では生出塚25号窯出土品（47）が示すように、細身の器形を採り、口縁部と底部が伸長化し、中間段が極端に短くなるという器形変化を生じている。

他方、埼玉古墳群中最小規模の前方後円墳である愛宕山古墳のA1類（44）は明黄灰褐色を基調とするが、軟質のものと還元がかかったものとがあって、焼成が一定していない。3条凸帯でありながら器高は40cm前後しかなく、埼玉古墳群中では最も小さい埴輪の一つである。生出塚製品に特徴的な低いM字形を持つ。年代の下ることが推測されるが、器形的には、底部の矮小化や伸長化は認められず、該期に属すものであろう。

朝顔形埴輪について附言すると、瓦塚古墳A1・B類に伴う朝顔形円筒埴輪（付図3-15～18・21）はともに口縁部中間の段はなく、頸部の凸帯は断面形M字形である。肩部は撫で肩だが、わずかに丸みを保っている。また口縁部は内彎気味に立ち上がり、開き方が小さい。口径の特に大きい個体には端部が水平に開くタイプ（15・20）がある。

第4期の年代は、瓦塚古墳造出し周辺から出土した須恵器群がMT15～TK10の過渡期的な特徴を示す（注31）ことから、6世紀前半でも遅れる時期、第2四半期ころに比定できよう。

第5期

主軸長108mの前方後円墳である鉄砲山古墳（注32）築造期に伴う円筒埴輪A類が該当する。全

体のわかる資料に恵まれないが、凸帯の断面形が低台形とM字形で突出度の高いもの(48)がその候補である。生出塚第1次調査2号捨場出土の焼台(49)はおそらく48と同工品であり、生出塚製品と見てよいであろう。6条以上の多条凸帯の円筒埴輪と推定される。また、生出塚第18号窯出土の8条凸帯円筒埴輪(51)も築造期の鉄砲山古墳に供給された可能性が高い(注33)。

瓦塚古墳出土の底部径が30cmを超える大型円筒埴輪で、4条凸帯以上と推定されながら、第1段が第2段の約2倍の長さを持つA4類(50)も該期に属するものであろう。凸帯は断面幅の狭い台形で、端正な作りである。赤色を呈するが、今のところ生出塚埴輪窯跡群に類例は知られておらず、他の窯の製品かもしれない。稲荷山古墳D1類(57)と2類も同様に第1段が長い4条凸帯の円筒埴輪であり、瓦塚古墳A4類とともに異例の存在である。内面に接合痕を多数残す粗製の埴輪であり、器形にも歪みがある。このため底部付近に板叩きやヘラケズリなどの調整を加えたものがある。もとより倒立して施したものではないが、一種の底部調整技法であり、畿内からこの時期に伝播した同技法の影響を受けたとしてよいであろう。凸帯が扁平な帯状(帯a・b)であることや円形透孔が不正形であることなどもこの年代観と矛盾するものではない。

多くの4条凸帯埴輪では第1段の伸長化は認められない。將軍山古墳C1類(52)とC2類(53)はともに段間が均等配分で、凸帯の形状(前者は上稜の突出する台形、後者は低台形)から該期後半ころの製品と推定する。両者とも未知の窯の製品であるが、後者は外面調整が板ナデという珍しいものである。將軍山古墳のA類(55)は赤色の色調と焼成から生出塚製品と推定されている(注34)。4条凸帯品で段間が均等配分である点ではC1・C2類と共通し、とくにC1類とは器形も近似している。しかし凸帯は極めて低い断面M字形のものであり、年代が下降するかに見える。しかし後述する生出塚D・E地点埴輪捨場出土の底部調整を持つ3条凸帯の円筒埴輪(61)と凸体の形状は何ら異なっていないので、該期に留めるべきであろう。生出塚埴輪窯跡においては凸帯退化の進行が早かったのである。山崎武氏は將軍山古墳A類に近似する生出塚第22号窯出土品(56)を生出塚遺跡埴輪編年の第Ⅲ期に比定している(注35)。やや細身化し、口縁端部の外傾が強いことから若干後出的である。

また瓦塚古墳A2類の4条凸帯円筒埴輪(54)は段間が均等配分であるが、底部径の矮小化が顕著であり、同系統と推定される將軍山古墳C1類よりも後出的である。

稲荷山古墳D3類(59)は粗製の円筒埴輪で、断面形がM字形で著しく低い3条の凸帯を伴っている。器形的には第1段がやや伸長化している。薄手であることが幸いしたためか底部の歪みはなく、底部調整を伴っていない。凸帯の上方に板が連続的に斜めに当たった痕跡があり、川西宏幸氏のいう凸帯押圧技法に該当しよう(注36)。プロポーションの近似する生出塚D・E地点埴輪捨場出土円筒埴輪は格子目状の線刻を内面に持つ同工品が多数あるが、いずれも厚手の作りで底部調整技法を伴うもの(61)が多い。山崎武氏は生出塚全4期編年で第Ⅲ期(6世紀第3四半期頃を想定)に比定されている(注37)。ともに当該期では早い時期の製品であろう。

愛宕山古墳B類(62)も同じ3条凸帯の円筒埴輪であるが、第1段の伸長化はさらに進んでおり、第2段の約1.7倍となっている。このことからすれば該期でも遅い時期の製品となるかもしれない。凸帯は断面台形状を呈し、突出度が低くない。凸帯に保守性を保ち続けた埴輪製作者集団の製品と

見られよう。淡い茶褐色を呈する独特な焼き上がりである。

朝顔形埴輪について附言すると、稲荷山古墳D2類に伴う朝顔形円筒埴輪（付図3-24）は頸部に極端に低いM字形凸帯を伴う。埼玉古墳群では鉄砲山古墳以降の現象である。

第5期の年代は、鉄砲山古墳からTK43形式の須恵器坏が、將軍山古墳からは同型式でも古い特徴を持つ須恵器が出土していることから6世紀後半でも早い時期、第3四半期に比定しておく。

第6期

鉄砲山古墳と將軍山古墳の築造後、一定の時間が経過した後に補充された円筒埴輪が該当する。66は7条凸帯の大型円筒埴輪の復原図で、寸胴な第Ⅰ器形を採り、極めて低い断面M字形凸帯を伴っている。生出塚遺跡第3号埴輪窯跡から出土した下半部と鉄砲山古墳出土の上半部分を合成したものである。鉄砲山古墳にはこれより少し底部径が細く、透孔の配置が異なる個体（67）もある。生出塚第1次調査1号捨場出土の8条凸帯の円筒埴輪（69）はさらに一回り小型で、器形は第Ⅲ器形を採るが、やはり鉄砲山古墳に供給された可能性を残している。

いっぽう、鉄砲山古墳の円筒埴輪には低位置凸帯のグループ（70・71）がある。第1段の長さは僅かに6～7.5cmしかない。第3期に二子山古墳で始まった低位置凸帯はこの段階にその程度を極限まで進行させたと見ることができよう。生出塚第16号窯出土の焼台（72）は同工品であろう。

將軍山古墳B類（74）は第1段の伸長化がかなり進行した3条凸帯の大柄な円筒埴輪である。愛宕山古墳B類の系譜上にあり、凸帯の断面形が三角形を呈する点でも個性の強い製品である。比較的丁寧な製作であり、底部調整技法は伴っていない。

	第1期	第2期	第3期	第4期	第5期	第6期
行田市域未知の窯	稲荷山古墳A類				將軍山古墳C2類	
生出塚埴輪窯		二子山古墳A1a類	丸墓山古墳A2類	瓦塚古墳A1類	鉄砲山古墳A類	鉄砲山古墳B類
		稲荷山古墳B類	天祥寺裏古墳	愛宕山古墳A1類	將軍山古墳A類	鉄砲山古墳C類
			二子山古墳A1b類			
			埼玉5号墳			
比企地方の窯		二子山古墳B類		瓦塚古墳B類		
		愛宕山古墳C類				
所在地不明の窯A			二子山古墳C1類		瓦塚古墳A2類	
			稲荷山古墳C類		將軍山古墳C1類	
所在地不明の窯B					稲荷山古墳D類	
					愛宕山古墳B類	將軍山古墳B類
					瓦塚古墳A3類	

第10表 埼玉古墳群円筒埴輪系統別編年表

3 朝顔形埴輪の編年（付図3）

主に肩部、頸部、口縁部の形態的特徴を指標として埼玉古墳群出土の朝顔形円筒埴輪の編年を試みる。普通円筒と異なり、復原できる個体が限られ、埼玉古墳群中の全ての前方後円墳を取り上げることはできないが、少なくとも稲荷山古墳出土朝顔形円筒埴輪の諸類型を取り上げ、検討を果たすことによって、普通円筒埴輪の編年案と整合性を有するかどうかを検証する必要がある。

第1期

稲荷山古墳のA3類とA4類が該当する。A3類（1～4）は円筒部5条凸帯の大型品であり、A4類（5・6）は推定4条凸帯の中型品である。ともに乳白色から淡褐色の色調を帯び、外面と口縁部内面に赤色彩色が残存する。同一工人集団の製作品である。肩部は半球形のドーム状をなしている。

頸部で強くくびれた後に口縁下段が外反して開くので、そのくびれ方は鋭角（80°前後）をなしている。頸部には断面三角形の凸帯が巡る。A3類の場合、口縁部は中間で明瞭な段をなしており、ここでいったん成形を休止し、端部をヨコナデ調整し、乾燥が進んだ段階で口縁部上段を成形する。いわゆる擬口縁技法であり、接合部に貼り付けられた断面台形状の凸帯は接合部で剥がれないための補強帯の役割を負っている。口縁部上段は外反の度合いを強めながら開き、端部ではほぼ水平となる。口径は円筒部最大径（肩幅）の約2倍である。また円筒部は寸胴な第Ⅰ器形を採り、半円形の透孔を伴っている。全体の形状は、筒状の器台の上に二重口縁の壺形土器を据えた形をよく残しているといえる。朝顔形埴輪第1型式と仮称する。

なお、参考に該期の小型朝顔形埴輪の特徴を挙げておくことにする。鴻巣市新屋敷遺跡の2例（7・8）は3条凸帯品である。その際だった特徴は口縁部中間の段がなく、ひとつながりに外反して開く器形を採っていることである。このことは小型品ではすでに原形からの乖離が進んでいることを示している。ただし、頸部の三角形凸帯と肩部の丸みは大型品に準じる特徴を有している。朝顔形埴輪第2型式a類と仮称する。

第2期

稲荷山古墳のB1類と二子山古墳例が該当する。B1類（9）は円筒部を失っているが、口径が60cmを越える大型品であり、普通円筒埴輪との関係から6条凸帯と推定される。胎土や暗赤褐色の色調から生出塚埴輪窯跡群の製品である可能性が高い。これに対し二子山古墳例（10）は褐色を呈している。頸部の復原直径が30cmあり、B1類よりも大きく、極めて厚手の製作である。ともに赤色彩色は施されていない。頸部のくびれ方は第1期の鋭角にくびれるものと異なって、B1類で推定90°、二子山古墳例で110°である。頸部凸帯は失われているが断面三角形となろう。B1類の口縁部は中間で弱い段をなしており、擬口縁技法が確認できる。接合部に貼り付けられた断面三角形の凸帯は補強帯の役割を負っておらず、装飾的なものである。二子山古墳例にも弱い段が認められ、擬口縁技法が推定されるが、凸帯は台形状で異なっている。全体として把握すれば、第1期のものより口縁部の開きが小さくなると同時に高さが増している点を新しい要素として指摘しうる。また口縁部中間の段が不明瞭ながらも残存している点は次の第3期との大きな相違点である。朝顔形埴輪第1型式亜式と仮称する。

第3期

稲荷山古墳のC1類とC2類と天祥寺裏古墳例が該当する。C1類（11）は円筒部6条凸帯の大型品であり、C2類（12・13）は少し小型である。これらは淡橙褐色の色調を帯び、赤色彩色は施されていない。同一工人集団の製作品である。肩部は半球形のドーム状をなしているが、第1期のものと比べると肩の張りが弱い。頸部でくびれた後に口縁部全体が弓状に外反して開き、中間部に段をもたないのが最大の特徴である。くびれの角度は鈍角（115°）をなしている。頸部には第1期のものより低い断面三角形の凸帯が巡る。C1類の場合、口縁部は中間でいったん成形を休止し、端部をヨコナデ調整し、乾燥が進んだ段階で口縁部上段を成形している。しかし段を設けずに直列に接合する。この技法は第1期の小型朝顔形円筒埴輪（7・8）にすでに認められた技法であり、第3期にいたってそれが大型円筒埴輪にも採用されてことを知りうる。朝顔形埴輪第2型式b類と仮称す

る。口縁中間部には断面M字形の低い凸帯（Mb類）が巡るが、これは補強帯の役割を負っている。口縁端部はC1類では斜めであるが、天祥寺裏古墳例では端部のみ屈曲させて水平に開かせている。B1類の製作地は不明であるが、天祥寺裏古墳例は生出塚埴輪窯跡群の製品と推定できる。

第4期

瓦塚古墳のA1類・A2類・B類と生出塚2号墳出土例、生出塚34～37号埴輪窯跡出土品が該当する。A1類（17）は鮮やかな赤色を呈し生出塚産である。A2類（15・16・18）は橙褐色の一群である。またB類は浅黄橙色を呈し肉眼で観察できる海綿骨針を含むので比企産の可能性を考えている。これらの資料間には著しい特徴の相違はなく、いくつかの共通点を挙げる事ができる。肩部は第3期のものに比して張りがなく撫で肩である。A2・3類と生出塚2号墳例では、頸部でくびれた後に口縁部全体が内湾して開くことが新しい特徴で、中間部に段はない。くびれの角度はいずれも鈍角（120°前後）をなしている。頸部の凸帯は断面形が台形またはM字形で、三角形のものはない。生出塚2号墳例の場合、口縁部は中間でいったん成形を休止し、端部をヨコナデ調整し、乾燥が進んだ段階で口縁部上段を成形しており、口縁中間部の断面台形凸帯は補強帯の役割を負っている。しかし口縁部中段に乾燥単位を見いだせない他の資料では連続的に口縁部を成形している可能性があり、その場合、中間凸帯は装飾的なものとなる。

口縁端部が現存するものはすべて端部を屈曲させて水平に開かせている。第3期の天祥寺裏古墳を嚆矢とする新形式である。朝顔形埴輪第3型式と仮称する。瓦塚古墳の朝顔形円筒埴輪は4条凸帯の中型品に復原可能だが、客体的に大型品（15）を含むのでA3類としておく。生出塚2号墳のものも4条凸帯であるが、A1・2類より一回りスケールダウンしたものである。両者は類似性が高く、生出塚埴輪窯跡群の同一工人集団の製作であろう。

なお生出塚埴輪窯跡群出土品の内、34・35号窯出土品（22）は口縁中段に僅かに段が観察され、擬口縁技法が採用されているので朝顔形埴輪第1型式垂式の古態を留めている。34・36・37号窯出土品（19）は口縁部が直線的に開くので別型式を設定し、朝顔形埴輪第4型式とする。ともに瓦塚古墳に埴輪を供給した窯ではないらしい。凸帯の形状から該期では古く位置付けられる。

第5期

稲荷山古墳D2類、將軍山古墳C類、生出塚19号窯跡出土例・同D・E地点埴輪捨場出土例が該当する。將軍山C類円筒埴輪に対応する朝顔形円筒埴輪（23）は肩部が前期以上に張りを失っており、口縁部の内湾の仕方が一段と強くなっている。頸部の凸帯は断面形が最も低いM字形（Mc類）であり、他の資料と共通している。普通円筒との対応関係から4条凸帯の中型品となろう。円筒部の凸帯は該期には少ない台形凸帯を有しており、生出塚以外の製品と推定される。

生出塚埴輪窯跡群の出土例は小型品であり、中型品と直接的な対比はできないが、内湾気味に開き、端部が外反して斜めに立ち上がる口縁部の形状には共通性が認められる。第3形式の屈曲して水平に開く口縁部の退化形態とすることができよう。將軍山古墳C類とともに第3形式垂式と仮称する。口縁部の開き方が小さいので頸部の鈍角化はさらに進行して135°～140°に達している。口縁部の凸帯は貼り付け位置が低い。25は幅の広い帯状の凸帯（帯b類）、26は断面形が最も低いM字形（Mc類）であり、肩部は張りを完全に失って長くなる傾向を示している。

稲荷山古墳D2類は頸部付近のみの残存なので、情報量は少ないが頸部凸帯の形状から該期とするのが妥当と考える。頸部径が20cmを超えるので大型品となろう。

第6期

將軍山古墳B類、生出塚16号窯焼台・同18号窯出土例が該当する。將軍山古墳B類は同古墳の普通円筒埴輪B類と対応するもので、円筒部が3条凸帯で第1段が長い(29)。肩部は完全に丸みを失って直線的なもの(27)が存在する。頸部でのくびれ方は極端に弱く、肩部最大径の80%にすぎない。口縁部は開き方が小さく、肩部となす挟角が鈍角(140°)となる。頸部が短いことも特徴の一つであり、僅かな段を持ってから口縁部は直線的に小さく開く。段部は乾燥単位となっており、接合部を跨ぐ状態で断面形台形の凸帯を巡らしている点は古い技法である。口縁端部はわずかに外反して開く。円筒部には断面M字形の低い凸帯のほかに台形の凸帯を伴う個体もあるが、前期と比較して壺模倣部の原形からの乖離が一段と進行している。朝顔形円筒埴輪第5型式と仮称する。

生出塚16号窯出土焼台(31)は円筒部の凸帯が5~6条と推定される大型品で、寸胴な第I器形を採る。肩部に丸みがなく直線をなす点は將軍山古墳B類と共通するが、頸部のくびれ方が強い点が異なる。口縁部(30)は強く外反して開くが、頸部は直立する可能性がある。18号窯出土例(32)も同様な器形を採り、頸部が直立する。31・32は口縁部と円筒部の凸帯が最も退化した扁平なものである。肩部の凸帯のみ高い台形凸帯であるが、これは補強帯であろう。朝顔形埴輪第6型式と仮称する。生出塚埴輪窯跡群最後の大型朝顔形埴輪であり、埼玉古墳群の鉄砲山古墳に供給された可能性も想定される。

第7期

中の山古墳出土の須恵質朝顔形円筒(33)が該当する。中の山古墳からは朝鮮半島栄山江流域の百濟地域に起源を持つ須恵質埴輪壺が多数用いられており(注38)、通常の円筒埴輪は伴っていない。須恵質埴輪壺は平底長胴で口縁部が外反して開く形態を取り、底部が焼成前に穿孔されている。凸帯や透孔はなく普通円筒埴輪とは全く系統の異なる器物であり、埴輪の代用品として用いられたものである。カキメを伴うA類は寄居町末野須恵器窯で生産されたことが判明している。半島から渡来した工人が製作した可能性が考えられる。これにたいして朝顔形円筒としたものは、焼成こそ須恵器と同質であるが、基底部から粘土紐を巻き上げて円筒状に成形している点、胴部と口縁部に各一条の凸帯風の凹線が巡る点、胴部に一對の小型の円形透孔を伴う点から朝顔形埴輪の延長線上にあると見ることができる。ただし肩部に平行叩きを伴う点と口縁部に波状文を施す点は須恵器製作工人の影響を受けたものであり、焼成も完全な還元焰焼成であり須恵器窯で焼かれたことは疑いない。器形について検討すると肩部が撫で肩であり、頸部が直立した後に口縁部が外反して開いているのは生出塚埴輪窯跡産の第6型式と共通点が多い。さらには口縁端面に凹線を巡らす処理も酷似している。このことから中の山古墳の須恵質朝顔形円筒埴輪は生出塚の埴輪工人が関与した可能性が高い。朝顔形円筒埴輪第7型式と仮称する。時期は中の山古墳から出土した須恵器にTK209型式に類似する坏身があり、最近の編年観では7世紀初頭ないし前葉に置くのが妥当であろう。したがって、生出塚遺跡で埴輪生産が終了する6世紀末ないし7世紀初頭より少し下降する時期の産物であり、埴輪消滅後に行われた例外的な埴輪の代用物であって、日本最後の埴輪とも呼べるもので

あろう。製作者は生出塚の退役埴輪工人で、須恵器生産工人として編入された可能性なども考慮されよう。

以下に、編年案に各説した朝顔形埴輪のメルクマールとなる壺部の変化を表にして掲げておく。

期	1期	2期	3期	4期	5期	6期	7期
型式(法量の大小)	1(大型5条・中型)	2a(小型3条)	1垂式(大型6条)	2b(大型6条・中型)	3(中型4条)		
該当資料	稲荷山A3・A4	新屋敷58・60号墳	稲荷山B1・二子山	稲荷山C1・C2	天祥寺裏		
肩部の形状	半球形	半球形	不明	半球形張り弱い	不明		
肩部と頸部の挟角	鋭角80°	鋭角	直角(90°~110°)	鈍角(115°)	不明		
頸部の凸帯	高い三角形	高い三角形	推定三角形	低い三角形	不明		
段の有無(強弱)	有(強)	無	有(弱)	無	無		
擬口縁技法の有無	有	無	有	有	無		
口縁部の形状	強外反	強外反	弱外反	強外反	内湾		
口縁端部の角度	水平	斜め	斜め	斜め	屈曲して水平		
口縁部凸帯	台b(補強帯)	台d(装飾)	三角(装飾)・台b	Mb類(補強)	台d		
その他	赤彩・半円形透孔	半円形・円形	B1は生出塚産か		生出塚産か		
4期		5期	6期		7期		
3(中型4条)	4(中型)	3垂式(中型4条・小型2条)	5(中型4条)	6(大型5~6条)	7(小型1条)		
瓦塚A1~3・B、生出塚2号墳	生出塚34・36・37号窯	將軍山C、稲荷山D2、生出塚D・E捨場	將軍山B	生出塚16・18号窯	中の山		
撫で肩	撫で肩	撫で肩	直線的	撫で肩	撫で肩		
鈍角(120°)	直角(115°)	鈍角(115°)	鈍角(140°)	鈍角	鈍角		
台形・M字形	台形	M字形	M字形	M字形	無		
無	無	無	有(極めて弱)	無	無		
有・無混在	無	無	有	無	無		
内湾	直開	強内湾	直開	頸部直立・口縁強外反	直立・弱外反		
屈曲して水平	屈曲して水平	斜め	斜め	斜め	斜め		
台d・Mb	台c	Mc・帯b	台d(補強)	Mb・Mc	凹線		
瓦塚A類と生出塚2号墳は生出塚産			くびれ弱・頸部短い	くびれ強	須恵質		

第11表 埼玉古墳群を中心とする朝顔形円筒埴輪の編年チェックリスト

4 編年作業の総括

(1) 円筒埴輪の時間差がある設置例の検証

埴輪の時間差設置については、埼玉古墳群の円筒・朝顔形円筒埴輪の編年を検討する過程において、稲荷山古墳だけの現象にとどまらず、二子山古墳、瓦塚古墳、愛宕山古墳、鉄砲山古墳、將軍山古墳にも存在することが推定された。一定規模の前方後円墳にはかなり普遍的な現象となる可能性がある。

ここでは、時間差設置の事実が遺構との関係性によって、明らかな全国の事例について見ていきたい。

①群馬県高崎市若宮八幡北古墳の場合

墳丘主軸長46.3mの葺石を持つ帆立貝式古墳(注39)で、明治44年の開墾中に舟形石棺が出土した。昭和48年度に当時としては画期的な全面発掘調査が行われ、多種多量の埴輪が出土した。円筒埴輪は基壇平坦面に二重に配置されていたが、普通円筒はA類とB類とが混在していた。A類は3条凸帯、B類は4条凸帯で、前者は第1段が長く、円形透孔を持ち、赤褐色の焼き上がりの特徴とし、後者は段間が均等配分で透孔はくずれた半円形と円形が同一個体中に共存しており、焼成にムラがあり淡黄褐色に焼き上がるが、外面上半部に赤色塗彩を施すことを特徴としている(第85図1・2)。またB類には少量ながらB種ヨコハケを施す例がある。朝顔形円筒埴輪は5条凸帯で段間が均等配分されている。D字形のくずれた透孔や肩部より上に赤色塗彩を施しておりB類の特徴を有している。

円筒埴輪を据えるにあたっては深さ20~25cmの掘り方を設け、基底部から2段目の凸帯が地表上に出る程度に埋めていたと考えられ、埴輪の密着状況からは布掘り状の掘方が考えられるという。

西側くびれ部付近に現位置で残っていたのは内側列に45本、外側列に25本であった。このうち種類の特定期できたのはA類8個体、B類31個体、朝顔5個体であった。

このA類とB類の間には型式的時間差が存在すると思われる。B類は色が淡く赤色塗彩を施すのに対して、A類は赤褐色を呈し、赤色塗彩を欠くのはちょうど稲荷山古墳のA類とB類の関係に對比できる。B類の製作者は粘土自体に鉄分を多く添加し赤色に近い色調に焼き上げることに成功し、赤色塗彩の工程を省略し得たのであろう。このほかB類が古いとする根拠にB種ヨコハケと半円形透孔の残存を挙げうる。逆にA類が新しいとする理由に第1段の伸長化がある。推測するにA類は第1段のみを埋め、3条の凸帯を地表に露出させていたのではないか。B類は第1凸帯を埋めているので、外観上、両者はともに3条凸帯となる。このことからすれば、A類は第1段が伸びたのではなく、地中に隠れる部分となる第1凸帯を省略したのだと言える。以上の推定が正しいとすれば、円筒埴輪列中の82%が当初のもので、18%は後に交換されたものということになる。破損や転落による逸失が生じたのであろう。

また、同古墳は多量の形象埴輪を前方部と造出し部の2箇所集中配置していた。しかし、前方部は当初から設けられたものであったのに対し、造出しは墳丘基壇面が完成した後に、盛り土を寄せかけるようにして付け加えられたものである。つまり時間差が推定されるのである。このことは円筒埴輪と同様に、形象埴輪にも時間差があって、前方部のものは当初の設置、造出し部のものは後から付加されたものとなる可能性が高い。報告者は古墳の築造時期を保渡田八幡塚古墳と対比してほぼ同時期の5世紀末と推定する。当を得た年代観であろう。ただしA類の円筒埴輪と造り出しの形象埴輪が追加された時期は少し下降することになる。これらの埴輪が追加された理由は単に埴輪の維持管理と新規追加ではなく、重大な契機によるものと推定される。主体部は舟形石棺が不時出土した後に破壊されてしまったわけだが、粘土槨や礫槨などの追加埋葬施設が存在していた可能性を考えてみたい。

②保渡田八幡塚古墳の場合

墳丘主軸長96m、3段築成の大型前方後円墳（注40）で、葺石と2重周堀及び4基の中島を施設している。中堤上にA区とB区の2箇所の形象埴輪配列区が設けられており、その位置は（第85図3）に示すとおりである。A区は円筒埴輪によって長方形に区画され、幅4.5m長さは11mあり、50余体の形象埴輪が配列されていた。これに対してB区は長方形区画の規模が幅4.2m長さ9mと一回り小さく保存状態がよくなかった。調査・報告者の若狭徹氏は両者に形象埴輪の法量や技法における工人の相違があり、保存状態においてもA区が良好なのに比してB区が著しく悪いことから、時間差のあることを想定された。その根拠は同古墳がF.A.降下直後の洪水に襲われた時、A区では、ほとんど破損していない状態で埴輪がその洪水泥土に被覆されたのに対して、B区はこの時点で、すでに破損が進んでいた可能性があるというものである。このような時間差を認めた場合、初葬者に対する複数回の埴輪樹立を想定するかB区が初葬者、A区が追葬者に対応するかのいずれかになるとする。同古墳には初葬の舟形石棺と追葬の竪穴式石槨とが存在しており、筆者は後者の可能性を考える。

また、円筒埴輪はA群製品とC群製品が主体的であり、A群製品は墳丘の主軸線から右側に、B

群製品は左側に多く設置されているため、それぞれが別個にストックされ、設置も別々に行われた可能性があるという。このA群製品の胎土は放散虫化石を含む海成粘土でかつ片岩と骨針化石を含む率が高く、群馬県藤岡市周辺の岩石組成と推定されている。これに対してC群製品の胎土は凝灰岩質を含有する淡水成粘土である。また型式学的な観察ではA群製品は口縁が開く器形を採り、断面三角の凸帯を有し、薄く軽量であるのに対して、B群製品は寸胴な器形を採り、断面台形の凸帯を有し、器肉が厚く重量があるといった差異を示している。これらのことから異なった技術系列に属し立地の異なる2箇所の埴輪窯から供給された可能性が高い。形象埴輪配列A区に設置された形象埴輪はこのうちA群に対応し、B区に配置された形象埴輪はC群に対応するものが主体的である。円筒埴輪のA群とC群が同時に設置されたものか否かは慎重な検証を要するが、形象埴輪設置B区を囲む円筒埴輪列中にC類11個体と共にA類5個体が含まれていたことから、A類の円筒埴輪によって、埴輪列の補修が行われた可能性が推定され、時間差の介在した可能性が高い。

③井出二子山古墳の場合

墳丘主軸長108mを測る3段築成の前方後円墳で、盾形の2重周堀をもつ。内部主体は後円部墳頂に舟形石棺の第1主体部と竪穴式石槨の第2主体部とがある。後者は構築レベルが高く、後出するものと見られている。

史跡整備のために実施された平成15年度の調査において、両くびれ部を確認するために設けた17トレンチにおいて中段円筒埴輪列の植え替え事実が見つかった（第85図4）。古墳完成後しばらくしてから中段テラスが崩壊したため、破損した円筒埴輪を埋め込んでテラスを再構築し、未破損の埴輪は再利用し、不足の埴輪を新たに補ったと見られた。後補の埴輪は3条4段構成の小型円筒埴輪で、二子山古墳の5条6段構成の円筒埴輪より後出する型式であり、保渡田古墳群の存続期間中は二子山古墳の営繕・管理が行われていたことを示すものである。

同古墳の築造時期は周堀底にわずかな間層を挟んでF.A.テフラの純堆積が見られたことと中島から出土した須恵器によってTK23型式からTK47型式の幅とされている。副葬品が5世紀後半代から6世紀までの幅を持っているため、複数回の追葬が推定できるという（注41）。

なお、新たに補った円筒埴輪は次の首長墓である八幡山古墳に用いられた3条4段構成の埴輪に類似しているという（注42）。

④金蔵山古墳の場合

墳丘主軸長165mを測る3段築成の前方後円墳で、後円部径は110m、高さ18mあって、墳頂部の平坦面は直径27mを測る。内部主体は後円部墳頂中心部に中央石室が、その南側に偏して南石室がある（第85図5）。両主体部は別個の墓壇に造られており、①中央区画の周囲に帯状に巡る石敷きが南区画に接する南辺のみ削り取られて著しく幅狭くなっていることと②両者に伴う埴輪のつくりや焼成、配列法の違いなどから、営造の時期が同時でなかったことを示しているといえるという。埴輪は墓壇掘方を完全に埋めて、その上に高さ30cmの土壇を盛ってから、その外縁の少し内側に立てられている。したがって埴輪の設置は埋葬完了後であり、仮に寿陵として築造されたとしても、埴輪の設置が埋葬以後であることを示している（注43）。

副葬品は中央石室では筒形銅器と鍬形石を含むのに対して、南石室ではこれらを欠き、武器武具

類が主体を占めていて明らかに年代の下がることが確認できる。また、形象埴輪の比較では中央区画の短甲形埴輪は方形板革綴式を表現するのに対して、南区画の短甲形埴輪は型的に新しい三角板革綴式を表現していた。普通円筒については完全に復原できたものは少ないが、中央区画に伴い蓋が組み合わされていたものは4条凸帯の鱗付円筒埴輪で、下辺の水平な半円形透孔を伴い、南石室に伴う円筒埴輪は3畳凸帯で長方形透孔を伴い、口縁部に補強凸帯を有するものであった（第85図7・8）。やはり両者を比較すると南区画のものが新しい。

⑤弁天山D2号墳の場合

墳丘主軸長40mの前方後方墳で、後方部墳頂平坦面に3基の埋葬施設（第85図6）があり、切り合い関係を有している。このうち最新のC主体部（割竹形木棺）の年代は出土鉄鏃から5世紀後半とされ、2番目のB主体部（箱形木棺）の年代は川西編年第Ⅲ期と推定される円筒埴輪から5世紀前葉から中葉とみられる。最古のA主体部（箱形木棺）は墳頂部の中心を占めている。

後方部墳頂中央部で検出された家形埴輪はA主体部の埋葬完了後に、その直上に置かれていたが、B主体部埋葬時にはすでに破損していて、B主体の墓壙によってさらに破壊されたと考えられている。また、後方部北側で検出された7本の円筒埴輪は東西1列に並んではいるが、両端のものは底部が主体部掘方検出面にあり、上部をほとんど欠失しているのに対して、他の5本は幅0.6m、長さ2.5m、深さ0.3mの土壙内に基部が埋められていたもので、口辺部まで現存しているものもあった。この土壙内からは前述の家形埴輪片と5本とは全く異なる特徴を持った円筒埴輪片が多く出土した。

このことから、5本の円筒埴輪はA主体（第1次埋葬）に伴うものではなく、B（第2次埋葬）あるいはC（第3次埋葬）主体部の埋葬に際して並べ替えられたものと考えられ、家形埴輪片が出土したことからB主体部に伴う可能性が最も大きいという。

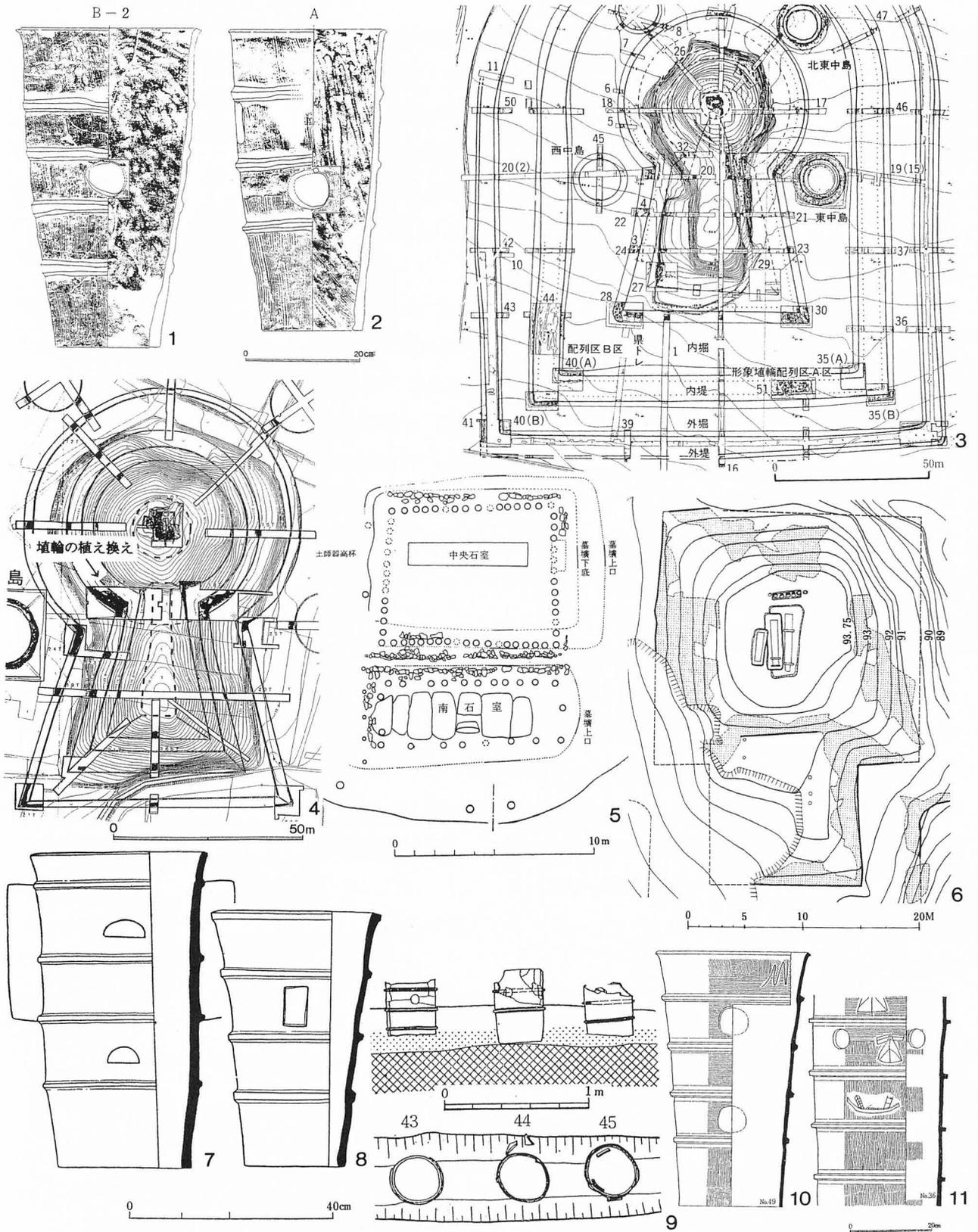
7本の円筒埴輪の内、東から2本目の円筒埴輪の特徴は高さ50.6cm、底径20cm、口径32.6cmの3条凸帯品で、凸帯の断面形は矩形で突出度が高く、透孔は円形で円弧を組み合わせたヘラ記号を伴い、内外面が赤色を呈し、焼成は良好であった。これに対して、両端の2本は底部径が小さく、上部でもあまり拡がりをみせないようであり、第1次埋葬に伴うものかもしれないという（注44）。

⑥カラネガ岳2号墳の場合

丘陵上に立地する造出し付円墳で、墳丘直径は34.5m、造出し長は1.5mを測る。内部主体は南北方向の粘土槨で割竹形木棺を用いたと推定されている。墳丘は地山の削り出し整形で、盛土はわずかに粘土槨を覆う程度のものであったらしい。このため極めて早い時期に盛土の流れ落ちを招く結果となった。葺石はもともとなかったようである。

墳丘裾周りの円筒埴輪列中の45本を調査した結果、底部径25cm前後となる4条凸帯小型品で底部の完存するもの（A類）と底部径30cm前後となる推定6条凸帯の大型品（B類）とが用いられており、後者は底部を打ち欠いて使用されていることが確認された。これらは最大幅0.6m、深さ0.28mの溝を掘方として設置されていて、A類には掘方の底面に据えるA1類と少し埋め戻してから据えるA2類とがあった（第85図9）。このように底部を欠いたり埋めたりするのは高さを揃える目的で行われたものであろう（注45）。

円筒埴輪の特徴はA類は2次調整がB種、一部C種ヨコハケで、凸帯は断面形が台形で円形透孔



1 八幡北古墳出土円筒埴輪B類(1:8) 2 同A類(1:8) 3 保渡田八幡塚古墳平面図 4 井出二子山古墳平面図 5 金蔵山古墳内部主体平面図 6 弁天山D2号墳平面図 7 金蔵山古墳円筒埴輪A類 8 金蔵山古墳円筒埴輪B類 9 カラネガ岳2号墳の円筒埴輪設置状態 10 カラネガ岳2号墳円筒埴輪A類 11 同B類

第85図 時間差配置の実例図

を伴うものが主体的である（第85図10）。川西編年のⅢ期またはⅣ期に対応しよう。これに対してB類には外面タテハケ調整で方形透孔を伴うものと2次調整A種ヨコハケで円形透孔を伴うもの（第85図11）とがあった。凸帯の断面形は矩形で突出度が強い。川西編年のⅡ期に対応するものであろう。したがって新旧2型式が併存していたことになるが、旧形式のものはことごとく底部を打ち欠かれていた。この作業は現場で行われ、底部はそのままうち捨てられていた。

ところで円筒埴輪の法量や凸帯数は古墳の墳形や規模と対応することが一般的であり、円筒埴輪の使用には一定の階層的規制があったものと推定されている（注6）。このことからすれば、当墳に許容されるものはA類の4条凸帯の円筒埴輪であろう。B類の6条凸帯の円筒埴輪は通常では100m級の前方後円墳に対応するもので、底部を打ち欠き高さを揃えていたのもこのためであろう。埴輪の設置が同時であるならば、旧形式のものは他の古い古墳から抜き取って用いたか、長らく保管してあった埴輪（デッドストック）を利用した可能性が考えられる。

⑦今城塚古墳の場合

主軸長190mを測り二重周堀を伴う前方後円墳で、6世紀前半に築かれた淀川北岸では最大規模の古墳である。実際の継体陵の可能性が高いとされる。保存整備を目的とする平成14年度の第6次調査では北側の内堤（中堤）の外堀側円筒埴輪列において、円筒埴輪の立て替えと推定できる事実が見つかった。張出東端部付近で、表面に顔を出している3個体の円筒埴輪の下に、2個体の底部だけが残り上部を打ち欠いた円筒埴輪が検出されたのである。3個体の埴輪は直下の2個体にまたがった状態であった。概報（注46）では、他の場所には同様の状況は見られず、その目的は不明としているが、埴輪を据えるための深さ0.1～0.3mの連珠形の溝に底部を打ち欠いて高さを調整した個体が存在していたことから、筆者は、破損した箇所に埴輪を補ったとき、もとの円筒埴輪の高さに合わせる目的で、底部を欠いたり、逆に破損した円筒埴輪の底部を残してその上に据えたりする調整が行われたのではないかと推定する。

⑧箸中山古墳・西殿塚古墳・中山大塚古墳の場合

出現期の前方後円墳として著名な3古墳においては、型式の異なる特殊器台または特殊器台形埴輪が混在しており、複数回の祭祀が行われたと考えられる。このうち箸中山古墳においては宮山型の特殊器台と特殊壺が最初の祭祀に使用され、都月型円筒埴輪の段階で祭祀が終わるとみられている。また、西殿塚古墳においては宮山型に続いて都月型、さらに器台型埴輪と時を違え少なくとも3型式の土器や埴輪を使って祭祀を行っている。西殿塚古墳では前方部にも埋葬が推定されているので、3種の土器祭祀のうち器台型埴輪による祭祀はその折りになされた可能性を近藤義郎氏は指摘している（注47）。

（2）胎土分析の結果から

今回、胎土分析を顕微鏡による包含鉱物と化石類の逐一記載方式で実施した理由は、同法で成果のある鴻巣市生出塚埴輪窯及び馬室埴輪窯跡との対比を行いたかったからである。生出塚埴輪窯跡の粘土採掘場から採取された粘土と埴輪窯跡から出土した埴輪片胎土の特徴（注48）は①海綿骨針化石を特徴的に多く含み、珪藻化石を基本的に含まない水成（海成）粘土であり、②砂粒は堆積

岩を主体とし、これに凝灰岩などを伴うCe群と火山岩類を伴うCd群とがあり、前者が11：3の割合で多い。

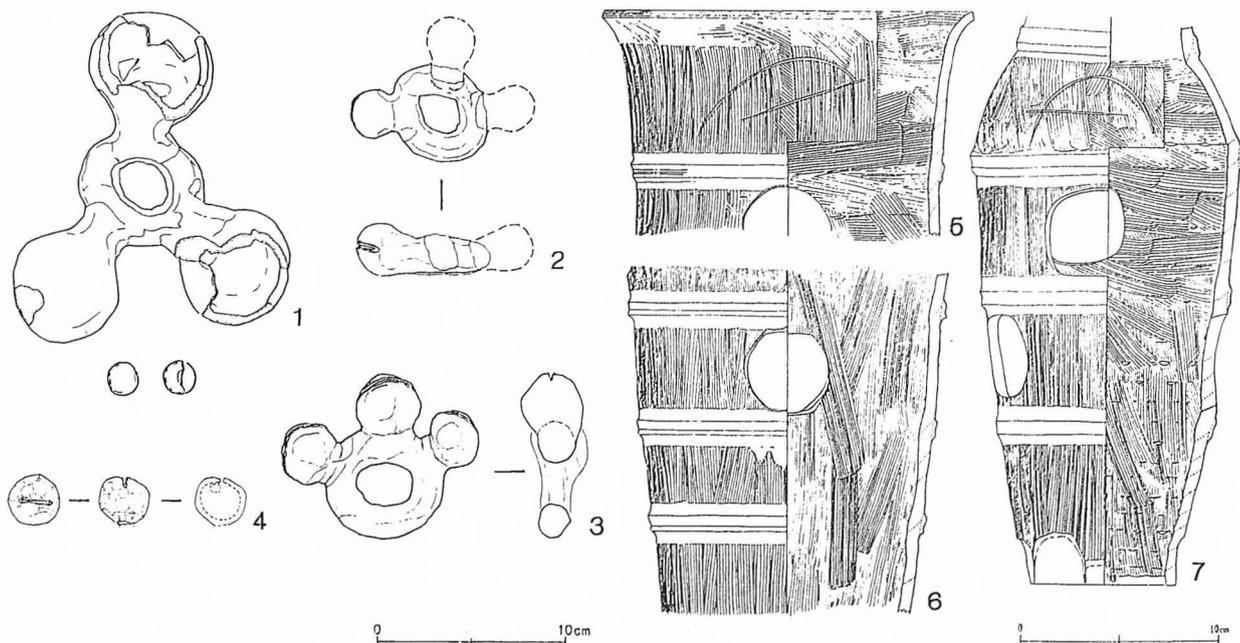
これに対して、今回の分析で類似する胎土は、珪藻を含まず骨針を含むⅡa類のうち、試料5と6、そしてⅡb類のうち8である。これらは砂粒もCe群と対応している。また、生出塚産埴輪は雲母を含まないことが特徴で、高温焼成の結果溶融したと考えられている。今回の分析試料中6は雲母を含まないので、生出塚産の可能性が高いといえる。また、焼成温度が低いために雲母が少量残る試料5と8も生出塚産の可能性を残す。

さらに、生出塚窯では片岩を全く含まないものが多く、この点では5が適合している。これらのことから、胎土や色調、焼きしまり具合などの外面観察から生出塚産と事前に推定した試料5と6(B類)はともに生出塚産である可能性が高まった。

これに対して、8～10は大きな砂礫を多量に含有し、ジルコンを特徴的に多く含む点で共通したグループであり、ジルコンをほとんど含まない生出塚産ではない可能性が高い。くわえて9と10は珪藻化石も骨針化石も含まないため、非水成環境で生成されたと推定されている。型式分類では8と9はD類で、10はC類となる。

10の口縁部外面には△形の特徴的なへら記号があるが、このへら記号は吉見百穴出土と伝えられる円筒埴輪(第86図5・7)と一致している。編年的には吉見百穴の時期まで下降するものではなく、金井塚氏が述べるように吉見町田甲原古墳群から出土したものであろう(注49)。これらは吉見町和名埴輪窯または周辺の未発見窯の製品である可能性が高い。

なお、和名埴輪窯出土の笄帽をかぶる美豆良の男子人物埴輪と行田市酒巻14号墳出土品は同一



1 新屋敷15号墳出土三環鈴形土製品 2 姥ヶ沢遺跡埴輪窯跡群一括出土三環鈴形土製品 3 姥ヶ沢遺跡第2号埴輪窯出土三環鈴形土製品 4 権現坂埴輪窯跡群第3号住居跡出土三環鈴形土製品 5～7 伝吉見百穴出土円筒埴輪

第86図 稻荷山古墳と共通する遺物実測図

作者の製品と見られるので、6世紀後半の段階には遠隔供給されていることが確実だという（注50）。和名窯ではD類の特徴を備えた埴輪は未発見であるが、大粒の砂礫を含む胎土が10と共通している。

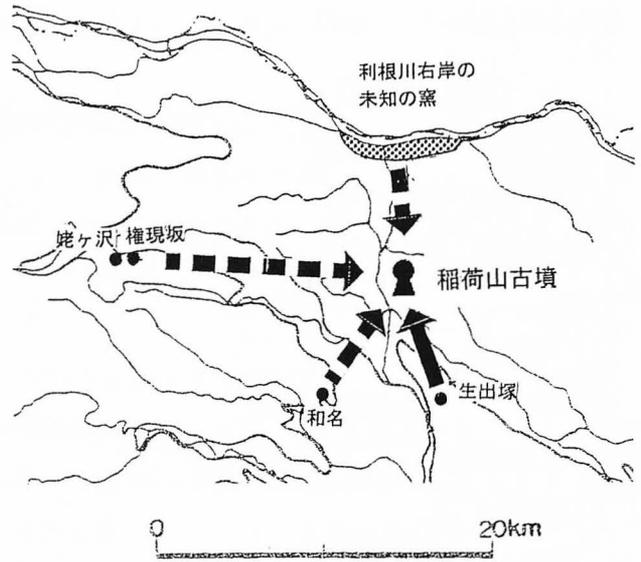
試料7については10と同じC類に型式分類したが、淡水種珪藻化石を含む点で胎土が10と異なる結果となった。したがって、和名埴輪窯か周辺の製品とした場合、粘土採掘層が異なっていた可能性がある。江南町（現熊谷市）姥ヶ沢遺跡谷部の珪藻分析結果（注51）によれば、産出種のすべてが淡水生種であり、埴輪製作が行われていた頃には湿地（沼沢）環境にあったことが確認されているので、こ

れを候補地の一つとなし得る。姥ヶ沢埴輪窯跡群で調査された8基では小型品しか生産されていないが、おなじ千代遺跡群に包括され、600mしか離れていない権現坂埴輪窯跡では大型品が焼成されており、新井端氏によって埼玉古墳群への供給の可能性が指摘されている。ここで留意されるのは、権現坂埴輪窯跡群と姥ヶ沢遺跡埴輪窯跡群から三環鈴形土製品（第86図2～4）が出土している事実である。県内出土の三環鈴形土製品には中空品で丸を伴うもの（1・4）と中実品（2・3）とがあり、法量にも大小がある。中空品で実物大の1（新屋敷15号墳出土品）が古く5世紀後半代に属し、中実品である3は6世紀第1四半期の操業とされる埴輪窯から出土している。これらは独立した土製品と見られるものが多いが、3のように馬形埴輪に付く馬具表現の可能性が指摘されているものもある。いずれにしても、稲荷山古墳と鴻巣市新屋敷15号墳から出土した三環鈴形土製品は千代遺跡群の権現坂または姥ヶ沢埴輪窯跡群から供給された可能性が高く、土製品が埴輪工人の製作品であることからすれば、円筒埴輪も同時に供給された可能性がある。（注52）

いっぽう胎土I類に分類された1～4は完全にA類に対応していた。粘土中に沼沢湿地付着生指標種と淡水種の珪藻を特徴的に多く含み、淡水成とされ、砂粒に火山岩類を含む点で他と区別される。群馬県波志江中宿遺跡のS字口縁甕粘土採掘場採取粘土と共通しており、群馬県域の火山地帯と連絡する利根川筋の沼沢地に候補が求められよう。したがって、未発見の埴輪窯の製品となる可能性がある。埼玉古墳群からさほど離れていない利根川右岸に埴輪窯の存在を推測してよいだろう。

12（第82図12）はIIc類に属し、火山岩を含まないが、淡水成である点でI類と共通項を持っている。孢子化石を特徴的に多く含む点でも一致しているので、I類に準じるものとなろう。外面観察上は乳白色の色調や赤彩を伴う点など稲荷山古墳A類と濃厚な関係を有している。

11は二子山古墳出土の方形透穴を伴う大型円筒埴輪（第82図11）で、東松山市諏訪山7号周溝出土品と同工品である。桜山埴輪窯跡か高坂台地周辺の未発見の埴輪窯で生産された可能性が極めて高い試料といえる。胎土はIIc類に分類され、淡水種の珪藻と骨針の化石とを含んでいる。



第87図 稲荷山古墳への埴輪供給地推定図

以上の検討から、稲荷山古墳への埴輪供給元を推定したのが第87図である。

(3) 円筒埴輪の多様性の意味と今後の研究課題

稲荷山古墳の埴輪は極めて多様性に富んでいたが、胎土の分析と型式学的な比較検討を経てAからD類の4類に分類され、製作地や製作時期に相違があることを検証してきた。以下に、簡潔に箇条書きで結果と課題を記すことにする。

ア 分類・製作地・製作時期

- ① A類は埼玉古墳群に近接する利根川右岸の未知の埴輪窯で製作された埴輪と推測され、古墳築造期のものである。B種ヨコハケが客体的に残存することや半円形の透孔、凸帯の形状、赤色塗彩を行うことなどから5世紀後葉でも早い時期の製作と考えられる。この時期には未だ生出塚埴輪窯跡群は操業されていない可能性が高い。

なお、形象埴輪にもA類と共通するものがあり、甲冑形埴輪や意須比を表現した巫女、小型人物塑像（注53）などはA類のみに存在して、他には見られないことも時期の古い証左となる。

- ② B類は生出塚埴輪窯跡群で製作された可能性が極めて高い。生出塚編年1期に属し、5世紀末に比定される。

- ③ C類は二つに分離される可能性があり、このうちC2類の一部（付図2-24）は吉見町和名埴輪窯跡か周辺の未発見の窯跡で製作された可能性がある。二子山古墳からも同類の埴輪が出土している。また朝顔形埴輪は江南町（現熊谷市）権現坂埴輪窯跡群か周辺の未知の窯跡で製作された可能性がある。両者とも凸帯の退化や朝顔口縁部の擬口縁技法消失などから6世紀第1四半期と推定される。

- ④ D類は吉見町和名埴輪窯跡か周辺の未発見の窯跡で製作された可能性がある。1・2類は第1段が中間段の2倍長となる特徴を備えており、正立状態での底部叩きや削りなどの技法を伴う。底部調整技法の伝播時期、凸帯の際だった退化状態や成形・整形の粗雑さなどから6世紀第3四半期まで下降するものと推定した。近畿地方ではほぼTK47形式までしか残存しないといわれる凸帯押圧技法を伴っているが、本例の場合は下降すると考えられる。

なお、D類に属する馬形埴輪片に6世紀第2四半期以降とされる頭部側板技法が存在しており、時期の下降する証左となる。

- ⑤ D類は後円部東側の内堀と中堤付近で他類をほとんど交えない出土状態を示していた。この部分では後円部が断続的かつ大規模な崩落を起こしているため、墳丘・内堀・中堤の再整備が行われたことと対応する可能性が高い。

イ 埴輪の時間差設置の契機について

具体例は10例を挙げるにとどまったが、時間差のある埴輪配置の実例は近畿から中国、関東に及び、時期も初現期の前方後円墳から前期、中期、後期に亘ることが確認できた。そのありかたを類型化すると次のとおりである。

- ① 墳頂部祭祀の複数回挙行（箸中山・西殿塚・中山大塚）
- ② 副次的な埋葬に伴う円筒埴輪列の新設（金藏山・弁天山D2）

- ③ 副次的な埋葬に伴う形象埴輪配列区の増設と円筒埴輪列の補修（保渡八幡塚古墳）
- ④ 造出しの増設に伴う埴輪の追加樹立（若宮八幡北）
- ⑤ 墳丘の崩れによる埴輪列の再整備（井出二子山）
- ⑥ 維持管理としての破損円筒埴輪の交換（今城塚古墳）
- ⑦ 古い円筒埴輪の再利用（カラネガ岳2号墳）

このうち②・③のほかにも、①・④・⑥も追加埋葬を機会として行われた可能性がある。また、⑦は埴輪に時間差があっても、樹立は1回のみであり、複数回樹立とは異なる。

ウ 稲荷山古墳における埴輪の時間差配置の契機について

稲荷山古墳においては4時期の埴輪設置を推定したが、その契機は追加埋葬と墳丘崩壊事故を有力な候補とする。以下に具体的に箇条書きする。

- A A類円筒埴輪は築造に伴う当初のもので、未調査の中心主体部に対応する。形象埴輪も墳頂部と中堤造出しとに設置された。
- B B類円筒埴輪は粘土槨の埋葬を契機に円筒埴輪と形象埴輪を追加設置（注54）した。
- C C類円筒埴輪は礫槨（注55）の埋葬を契機に円筒埴輪と形象埴輪を追加設置した。
- D D類円筒埴輪は後円部墳丘崩落を契機として円筒埴輪と形象埴輪を局部的に設置した。

これらの時期はAは5世紀後葉の早い段階、Bは5世紀末、Cは6世紀初頭、Dは6世紀中葉（第3四半期前半）に比定できる。

エ 今後に残された課題について

埴輪の多様性分析の方法には同工品論などのように工人集団や埴輪供給体制の解明を目的とする水平的な方法（注56・57）と編年学のように埴輪の変遷を明らかにしタイムスケール付与を目的とする垂直的な方法とがある。今回提起した埴輪の複時樹立は後者に属するが、埴輪の系統を踏まえる必要性から前者の方法と相まって進めるべき課題と考えている。

埴輪の製作地については4つの候補地を探り出したが、ほぼ確定的なのはB類の生出塚埴輪窯跡群だけであった。臨時的な生産体制が想定される埼玉古墳群近傍のA類生産集団の段階から進んで、生出塚埴輪窯跡群を開窯させたのは稲荷山古墳被葬者であったろう。また、次の段階には吉見町和名や江南町姥ヶ沢・権現坂埴輪窯跡群からも埴輪が供給された可能性がある。いっぽう生出塚を日本有数の大規模埴輪製作遺跡に発展させたのも埼玉古墳群を営んだ首長たちであったことは疑いない。このことは埴輪の供給だけでなく、造墓に人民を徴発できる領域の拡大を示している可能性があり、埼玉古墳群の権力基盤を究明する一方法ともなる（注58）。現在は荒削りで推測の多い検討にとどまっているが、さらに精度の高い研究にすることが今後に残された大きな課題である。

最後に、埴輪は古墳築造の一環として、たった一度しか設置されていないと思いこんで埴輪研究に臨んでいる研究者は少なくないと聞く。しかし実際には大型首長墓などに複数回の樹立例は存在している。このことに注目すれば、さらに多くの事例が発見でき、より詳細な埴輪研究を展開することが可能となろう。今回の検討結果が埴輪研究だけでなく、埴輪を介して行う古墳研究にも資することができれば幸いである。

注

- 1 若松良一「同一古墳における円筒埴輪の多様性の分析」『法政考古学』第7集 1982
- 2 柳田敏司ほか『とやま古墳』埼玉考古学会 1979
- 3 栗原文蔵・小林重義「行田市須賀 大稲荷古墳群について」『埼玉考古』第12号 1974
- 4 大谷 徹ほか『新屋敷遺跡D区』埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1998
- 5 水村孝行『桜山窯跡群』埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1982
- 6 増田逸朗「辛亥銘鉄剣と武蔵国造」『古代王権と武蔵国の考古学』慶友社 2002
- 7 テフラ分析を経たものではないが、10年度3区②地点で堀底から0.3～0.7mのレベルに観察された。次次の二子山古墳では堀底に堆積が認められている。
- 8 徳田誠志・清喜裕二・有馬伸「継体天皇 三嶋藍野陵墳塋裾護岸その他工事区域の調査」『書陵部紀要』第55号 2004
- 9 宮内庁書陵部『出土品展示目録 埴輪V』2006
- 10 一瀬和夫『大王墓と前方後円墳』吉川弘文館 2005 p113～117
- 11 4に同じ
- 12 米沢雅美「塚山古墳群の埴輪製作集団」『埴輪研究会誌』第10号 2006
- 13 森田克行ほか『新池』高槻市教育委員会 1993
- 14 坂本和俊氏から工人の年齢構成の示唆を受けた。
- 15 酒井清治「須恵器の編年と年代観」『日韓古墳時代の年代観』国立歴史民俗博物館ほか 2006
- 16 杉崎茂樹『二子山古墳』埼玉古墳群発掘調査報告書第5集 埼玉県教育委員会 1987 埼玉古墳群
- 17 鴻巣市教育委員会の山崎 武氏より御教示を受けた。
- 18 東松山市教育委員会の江原昌俊氏の御教示を受け、熟覧したところ、口縁端部の調整や凸帯の調整、×状のヘラ記号まで共通していたので、城倉正祥氏にハケ目の同定を依頼したところ、同一ハケであることが確認された。
- 19 杉崎茂樹『愛宕山古墳』埼玉古墳群発掘調査報告書第3集 埼玉県教育委員会 1985 埼玉古墳群
- 20 若松良一『二子山古墳・瓦塚古墳』埼玉古墳群発掘調査報告書第8集 埼玉県教育委員会 1992 堀底に堆積し、白色粘質土と呼んだものがF.A.と推定される。
- 21 杉崎茂樹『丸墓山古墳・埼玉1～7号墳・將軍山古墳』埼玉古墳群発掘調査報告書第6集 埼玉県教育委員会 1988
- 22 鴻巣市教育委員会の山崎 武氏より御教示を受けた。
- 23 山崎 武『鴻巣市遺跡群Ⅲ 生出塚遺跡D・E地点』鴻巣市教育委員会 1994
- 24 20に同じ
- 25 田中正夫「史跡埼玉古墳群保存修理報告 丸墓山古墳修理事業の報告」『調査研究報告』第2号 埼玉県立さきたま資料館 1989
- 26 大谷 徹ほか『新屋敷遺跡C区』埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1996
- 27 杉崎茂樹『瓦塚古墳』埼玉古墳群発掘調査報告書第4集 埼玉県教育委員会 1986
- 28 若松良一『奥の山古墳・瓦塚古墳・中の山古墳』埼玉古墳群発掘調査報告書第7集 埼玉県教育委員会 1989
- 29 若松良一『二子山古墳・瓦塚古墳』埼玉古墳群発掘調査報告書第8集 埼玉県教育委員会 1992
- 30 早稲田大学大学院生の城倉正祥氏よりご教示を受けた

- 31 若松良一「瓦塚古墳の調査から一造り出し出土の供献土器一」『調査研究報告』第3号 さきたま資料館 1990
- 32 杉崎茂樹『鉄砲山古墳』埼玉古墳群発掘調査報告書第2集 埼玉県教育委員会 1985
- 33 円筒埴輪の凸帯数に一定の規制があったことを前提にすると、このような大型埴輪は埼玉古墳群の首長墓以外への供給は考えにくい。
- 34 岡本健一『將軍山古墳』埼玉県教育委員会 1997
- 35 23に同じ
- 36 市瀬和夫氏によれば古市・百舌鳥古墳群では仲津姫陵古墳にはじまり、仁徳陵古墳以降に顕著となり、TK47型式期頃まで存続されるとされるが、関東地方では6世紀以降に降る例がある。本例のような凸帯の極端に低いケースは例外的であり、このことのみをもって、年代を古く見ることは困難である。
- 37 23に同じ
- 38 若松良一「武蔵埼玉古墳群と朝鮮半島系遺物」『古代文化』第18号 古代史研究会 2001
- 39 徳江秀夫ほか「若宮八幡北古墳の埴輪」『高崎市史研究』第4号 1995
- 40 若狭 徹ほか『保渡田八幡塚古墳保存整備事業報告書』群馬町教育委員会 2000
- 41 若狭 徹『史跡保渡田古墳群 井出二子山古墳発掘調査概報』群馬町教育委員会 2006
- 42 若狭 徹「群馬県群馬町井出二子山古墳の調査」『考古学ジャーナル』533号 2005
- 43 西谷真治・鎌木義昌『金蔵山古墳』倉敷考古館 1989
- 44 田代克己「弁天山D2号墳」『弁天山古墳群の調査』大阪府教育委員会 1967
- 45 岡内三真ほか「京都府長岡京市カラネガ岳1・2号墳の発掘調査」『史林』64巻3号 1981
- 46 高槻市教育委員会『史跡・今城塚古墳 平成14年度 第6次規模確認調査』 2004
- 47 近藤義郎『前方後円墳に学ぶ』山川出版社 2001 P68～72
- 48 山崎 武『鴻巣遺跡群12 生出塚遺跡W地点』鴻巣市教育委員会 2006
- 49 金井塚良一『吉見百穴の研究』校倉書房 1980
- 50 吉見町教育委員会の弓明義氏よりご教示を頂いた。
- 51 新井 端『千代遺跡群 弥生・古墳時代編』江南町教育委員会 1998
- 52 新井氏には埴輪を実見していただき、試料7は権現坂のものと胎土が似るといふ御意見をいただいている。
- 53 若松良一「資料報告 武蔵埼玉稲荷山古墳の埴輪Ⅱ」『調査研究報告』第17号 埼玉県立さきたま資料館 2004
- 54 ここでいう追加は新たな場所への増設だけでなく、破損した埴輪列の交換も含んでいる。
- 55 礫槨と粘土槨の先後関係は確定していないが、占地を主な根拠として、推定した。
- 56 犬木 努「同工品識別をめぐる諸問題（覚書）」『埴輪』第52回埋蔵文化財研究集会 2003
- 57 城倉正祥「埴輪生産の多様性」『古代文化』第57巻第10号 2005
- 58 安閑紀に記す武蔵国造の内証とその結果として屯倉の献上伝承なども、この視点によって検証が可能となろう。

第3節 土師器・須恵器の様相と年代比定

今回の整備に関連した発掘調査で出土した土器類のうち形状の判明した主なものは、須恵器が平成9年度5区内で確認した、後円部西側造出し付近出土のものが多く、土師器は平成9年度1区内で検出した内堀北東コーナー部堀底からやや浮いて出土したものが多かった。

まず、それぞれの器形の特徴から、古墳群内と周辺遺跡出土品とを比較して、年代的な位置づけを検討するとともに、性格を考えてみたい。

1) 須恵器の年代的な位置づけ

器形の判明したものに、坏・坏蓋・無蓋高坏・甗・有蓋脚付短頸壺・甕がある。このうち、ほぼ全体が誤りなく復原できるものの一つが第80図（以下省略）3の坏（身）である。改めて特徴を記すと、口縁部径10.8cmで、口縁部の立ち上がりは薄く、端面が作り出されているが内傾が著しい。底部は丸みを持ち、外面の受け部から1.2～1.5cmの部分を残して回転ヘラケズリをして仕上げている。砂粒の動きから判断されるロクロの回転方向は右回転である。

さて、その特徴から並行関係が推定される陶邑古窯址群のI期末・TK23、TK47型式の坏の特徴と比較してみることにする。『陶邑古窯址群I』の記述では「TK23からTK47にかけて、坏は底部が、蓋は天井部がふくれて丸味を増し、次第に小型化」し、「ヘラ削りの範囲はせばまり、削りは粗くなる」とともに、「坏のたちあがりは短くなって全体に内傾しはじめ」、「たちあがり端面の内傾度も著しくなる」とされる。

時期	指 標	型 式
I	短脚1段透かし高坏	TK73→TK216→TK208→TK23→TK47
II	長脚1段透かし高坏以後	MT15→TK10→MT85→TK43→TK209

陶邑古窯址群の型式変化と指標（田辺1966『陶邑古窯址群I』より）

坏身の口縁部径はTK23の主体は10.5～11cm、TK47が10.5～11.5cmにあるので、決め手にならない。底部の丸味は両者の中間的と言えようか。ヘラ削りは比較的範囲が広く、TK23に近いといえるが、端面は傾斜が著しく、シャープさに欠け、ロクロの右回転も新しい要素と言える。（TK23段階で右回転の個体が既に3割程度とされている。）

結論としては、新しいと判断される要素と伝統的な要素とが混在して、TK23の古あるいはTK47の新段階とするのは妥当でないが、いずれの型式の範疇で理解してもよいことになるだろう。ただし、80図15の坏（蓋）や16の坏（身）は小破片からの復原だが、小径化を読み取ってよいことになれば、今回出土した須恵器坏群の型式観はTK47と判断するのが妥当となる。

また、稲荷山古墳造出し付近出土と伝えられ、I期末型式とされる須恵器群の高坏の坏部とほぼ共通した特徴を読み取ることができるので、共通の型式と考えてよいだろう。

1・2の有蓋脚付短頸壺もほぼ完形に復原できた。同様の器種は陶邑古窯址群からの報告例がなく、その他、古墳や集落出土例も乏しく、共伴関係からは型式を推定できない。壺や蓋、あるいは脚部など、他の器形と共通する部分の要素を比較することにする。

まず、古く考える要素としては、脚部の長方形四窓透かしがある。前掲の『陶邑古窯址群I』で

は、高坏の脚の透かしはTK23以降は四窓のものが見られなくなるとされているが、透かしの形態そのものは細く、I期半ばまでに多く見られる大きな透かしのあけ方ではない。また、脚端部の外面の処理もシャープさに欠ける。

陶邑古窯址群I期末のTK47型式並行とされ、猿投編年I期第5小期とされる名古屋市東山11号窯出土の高坏脚には四窓スカシのものがある。陶邑古窯址群以外の窯跡産であれば、こうした古い特徴が新しい時期まで遺存しているので、四窓というだけでことさら古く考える必要はないであろう。さらに壺と蓋の口縁部内面の処理についてだが、端面と呼ぶにはあまりに形骸化して、観察表では「段を形成」と表現したが、I期中でも新しくする要素である。こうした特徴からすると、前述の坏と同一型式と考えて不都合は無いものと考えられる。

最後に、小破片しか出土していないが、甕について触れておきたい。口縁端部の形態のわかるものがないので、体部破片の内面調整に注目してみたい。23～25は小型の甕の体部破片で内面の同心円文（タタキメ）をナデで仕上げている。26～28は大型の甕体部で、28は同心円文をナデで仕上げているが、同心円文が残されているが、26・27は全く同心円文が残っていない。ナデ消しているのかあるいは同心円の刻まれていないタタキ道具の使用の可能性もあろう。『陶邑古窯址群I』によれば「TK23型式以前に属する須恵器（甕）は、ほとんど同心円文を意識的に消して」おり、「TK47でも50%以上の甕は内面の同心円文を消している」ので、これらの甕破片もTK23・TK47期の所産と考えて差し支えない。

以上、今回出土した須恵器の型式観については、従前、伝稲荷山古墳出土須恵器群について評価されてきたのと同様な結果となるが、TK23形式の後半～TK47期の範疇で理解してよいものと思われる。

2) 土師器の型式的序列

出土した土師器で器形の判明したのは坏と高坏がある。

坏については所謂『須恵器模倣坏』とよばれるもので、関東地方にあっては古墳時代後期の土師器のメルクマールとされるものである。

北武蔵での須恵器の発見例は古墳では稲荷山古墳が最古級の型式となろうが、集落では若干先行する型式の発見があって、須恵器模倣坏の出現も本古墳での発見例より先行する例があるのだろうが、一般化するのにはTK23型式出現前後からだろう。成形は力の強くない回転台の使用が推定されており、底部外面の調整が手持ちのヘラ削りという点は須恵器と顕著に異なる点だが、その他はヨコナデまたはナデによって仕上げられており、仕上げ調整も須恵器に似ている。大きさについても、TK23の口縁部径が12～12.5cm、TK47が11.5～12cmの範囲にあり、古式な模倣坏の口径もこの範囲にほぼ収まるので、法量についても忠実に模倣していると言える。

さて、具体的に今回出土した模倣坏について、まず、口縁部端部の形態に着目してみたい。須恵器ではこの時期の坏は、その端部に端面を作り出すのが通有の形で、その変化については上述したとおりである。

今回報告する資料では、9・10・12・13はいずれも平成9年度1区、内堀北東コーナー出土で後述する高坏群と共伴する可能性が強いものであるが、口縁部に須恵器と同様に端面を作り出してお

り、工人が須恵器の細部形態に熟知して製作にあたったことを伺わせる。それに対し、11・14は平成9年度4区のくびれ部西側の周構内出土で、端部を単純につまみながら丸く仕上げている。須恵器の形態を忠実に模倣していない。11の場合は立ち上がりは僅かに丸味を帯び、14は底部との境の稜の作りが雑で、これは製作者が実物の須恵器を知らないか、または忠実に製作する意図を失ってしまっているかであろう。端面を持つものより形式的に後出するのかまたは、形態のバリエーションと考えるかである。

同じ古墳群内で同様の形態の模倣坏は稲荷山古墳南方の小円墳群・埼玉2・3・4・6・7号墳の周溝内から出土している。それぞれ若干大きさの違いはあるが、形態的、製作技法的にはほぼ同工であって、いずれの模倣坏も端面を作りだしている、丸く仕上げているものはない。これらの小円墳群の築造時期は、5号墳が出土した陶邑古窯址群Ⅱ期の坏の大型化に対応する大口径の坏を出土していることから、ある程度の築造年代の時間幅が想定できるが、2号墳周溝底出土のTK47型式並行の須恵器坏などから、おおかたは稲荷山古墳とほぼ同じ時期の築造と考えられている。

次に、主軸長43.8mの帆立貝式古墳である熊谷市上中条所在の鎧塚古墳の出土土師器を検討してみよう。同古墳では埴輪列がめぐる墳丘裾から2ヶ所の土器集中箇所が発見されている。調査者はそれぞれを第1次・第2次の「墓前祭祀」とよんでいるが、大形器台を中心に据えて、周囲に高坏と坏を主体に配置しており、それらが葬送儀礼に使用された後に放置された可能性の高いものである。

第1次墓前祭祀からは模倣坏3点が出土しており、端部は第88図当該図5のように端面を持つものと4のように丸く仕上げるものとが混在する。一方、時期が下るとされる第2次墓前祭の模倣坏は大方が丸く仕上げられており、端面を持つものは少数で、8のようにⅡ期の大型化に対応する可能性のある模倣坏もあって、形骸化の進行を指摘できる。

模倣坏以外の器種では高坏の形態が明らかになっているので、これについて検討してみたい。今回報告した高坏はいずれも内堀北東コーナーの覆土中から出土したもので、その状況からすると中堤北東コーナーでこれらの土師器群を用いておこなわれた祭祀行為に使用されたものが転落した可能性が強い。

裾を屈曲して広がるように作った筒状の脚に、「ほぞ組」された、外反して大きく開くラップ状の口縁部を持つ坏部を接合して作る特徴を持っている。図示した個体はいずれも近似性を持っており、口縁部の発見されていないものもほぼ同形態であることは容易に想像できる。また、このほかにも大形の高坏と思われる口縁部破片もある。

成形・調整技法としては、5個体とも例外なく脚部の筒状部分の内面をヘラ削りする以外はナデまたはヨコにナデて仕上げている。

以上の比較資料として、前述の鎧塚古墳の出土土器がある。第1次・第2次墓前祭祀いずれの土器群にも高坏が含まれている。

第1次墓前祭祀の7、10は、稲荷山古墳の3～7と似ていることがわかる。細部で異なるのは坏口縁部の外反の度合いが稲荷山古墳より弱い点があげられ、10では直線的である。そして筒状の脚部分の下半が外方に広がって太い点も差異点として指摘できるだろう。

第2次墓前祭祀でも14個体の高坏が出土しており、12、14はそのうちの代表的形態の高坏である。第1次墓前祭の高坏と比較すると明らかに脚の短小化が進み、その内面をドーム状に作っていて、一段階新しい時期の所産と言えるだろう。余分な記述となるが、鎧塚古墳の墓前祭祀各土器群にはそれぞれ須恵器の大形器台と高坏が伴う。古い特徴はいずれにも認められが、稚拙さの漂う地方色の色濃い須恵器で陶邑古窯址群出土品と正直に型式的並行関係を考えるのは危険である。第1、2次墓前祭祀の須恵器は共に、陶邑古窯址群Ⅰ期でもその前半にさかのぼるようにはとても思えない。

以上の検討から、今回報告する稲荷山古墳出土の土師器群は、埼玉古墳群の埼玉2号墳（梅塚古墳）などの小円墳群や鎧塚古墳第1次墓前祭祀の土師器群とほぼ並行する時期の所産と考えて矛盾がない。

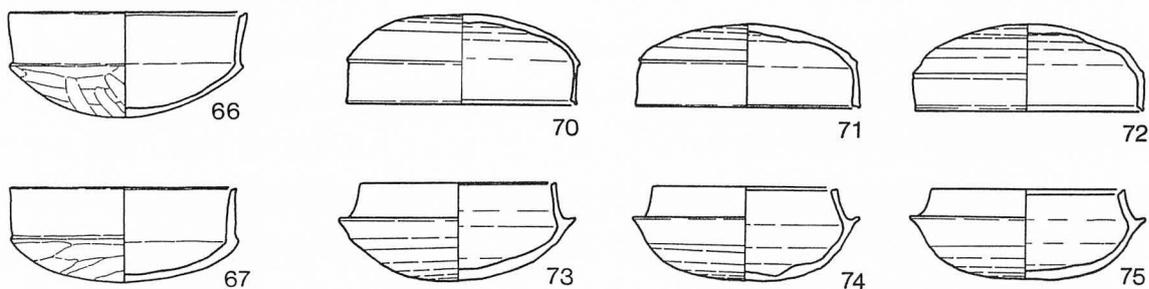
3) まとめ

今回の整備事業で出土した須恵器・土師器群は過去に出土または、出土と伝えられていた土師器・須恵器と同一型式であって、ほぼ同じ時期の所産と判断されるものである。平成9年度1区出土の端面を持つ模倣坏と高坏群は一括品となる可能性が高く、中堤北東コーナーの、現代風にいえば「鬼門」の位置、すなわち古墳の「要所」にあり、避邪祭祀にかかる容器類と推定可能なのではなかろうか。

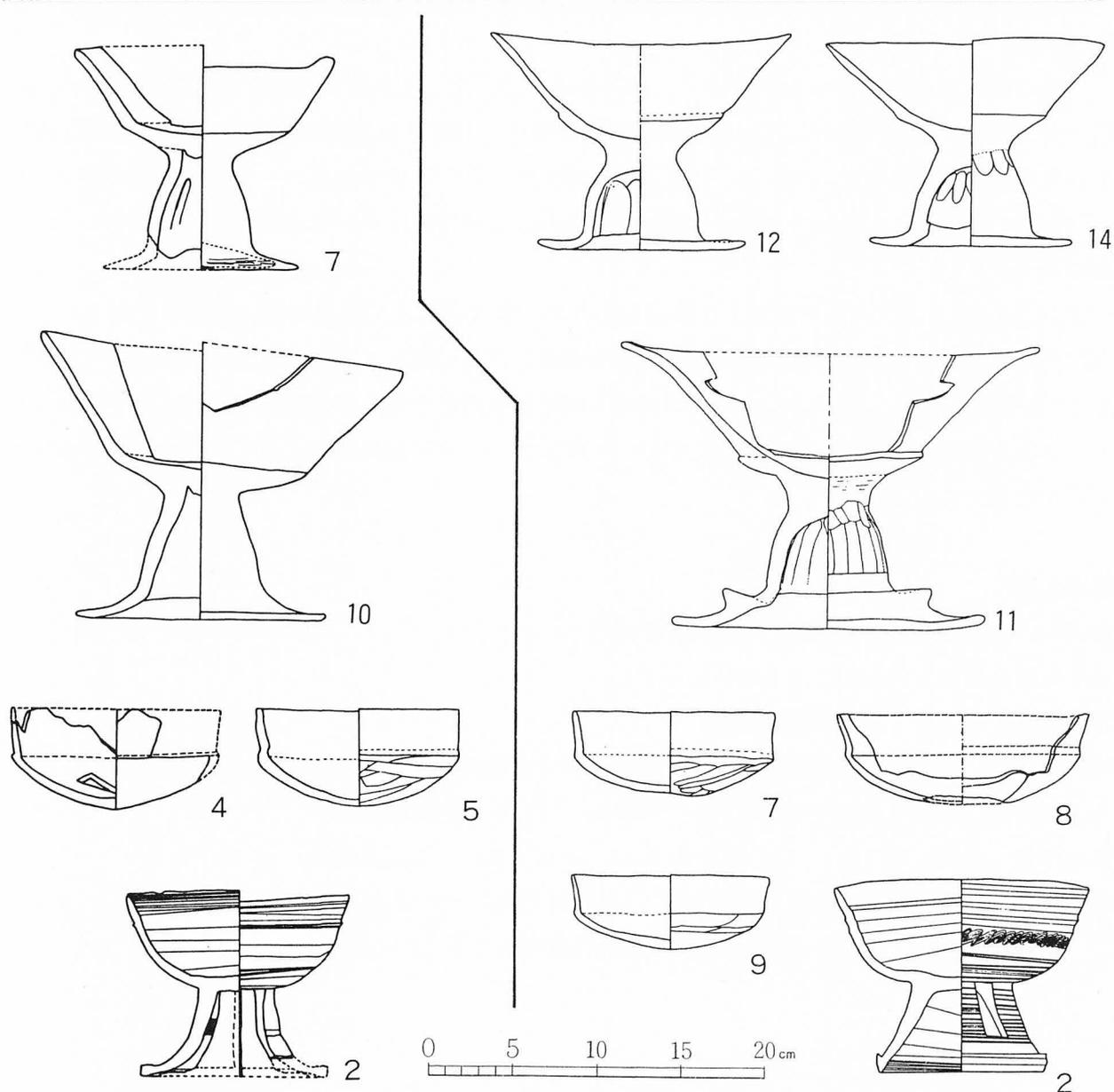
また、平成9年度5区の須恵器・土師器模倣は後円部造出し上での葬送儀礼行為に使用されたものか、あるいはくびれ部付近の墳丘裾等での葬送儀礼行為に関して使用されたものが転落・移動してきた可能性が強い。須恵器については産地を同定する眼目を持ち合わせないので言及できないが、先進須恵器窯産の洗練された須恵器を豊富に使用した、まさに北武蔵の王者に相応しい葬送儀礼土器群が想像される。

参考文献

- 田辺昭三 1966『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ
埼玉県教育委員会 1980『埼玉稲荷山古墳』
熊谷市教育委員会 1981『鎧塚古墳』
愛知県教育委員会 1981『猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告Ⅱ』
埼玉県教育委員会 1988『丸墓山古墳・埼玉1～7号墳・将軍山古墳』
齋藤孝正・後藤健一 1995『須恵器集成図録3 東日本編Ⅰ』雄山閣出版
宮昌之 1998「稲荷山古墳出土の須恵器」『調査研究報告11』県立さきたま資料館
西口正純 2000「稲荷山古墳確認調査の概要」『調査研究報告13』県立さきたま資料館



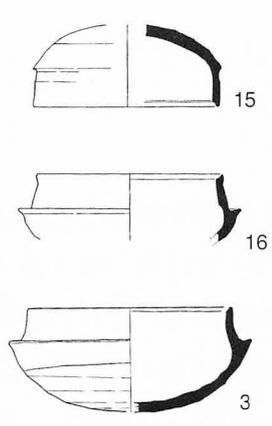
埼玉2号墳出土土師器 (66・67) 及び須恵器 (70~75)



鏡塚古墳第1次墓前祭祀出土土師器
(2は須恵器)

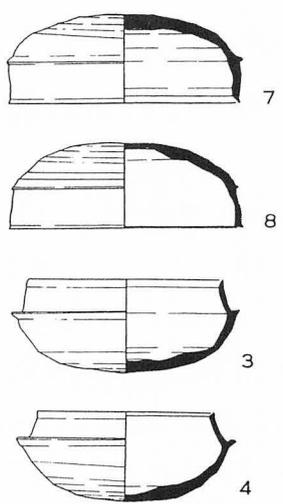
同左 第2次墓前祭祀出土土師器
(2は須恵器)

第88図 出土土師器の比較検討資料

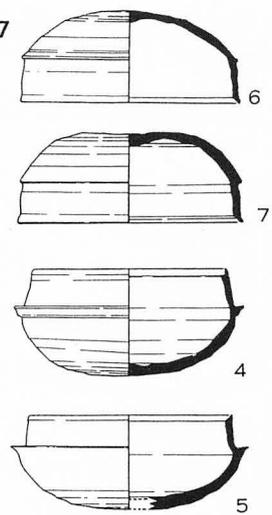


稲荷山古墳出土・杯

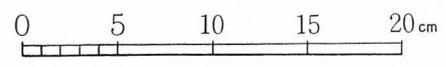
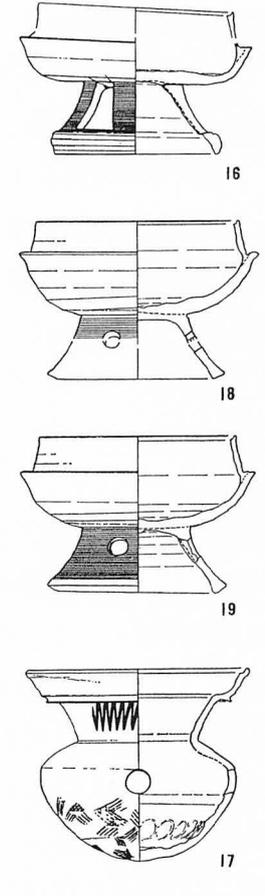
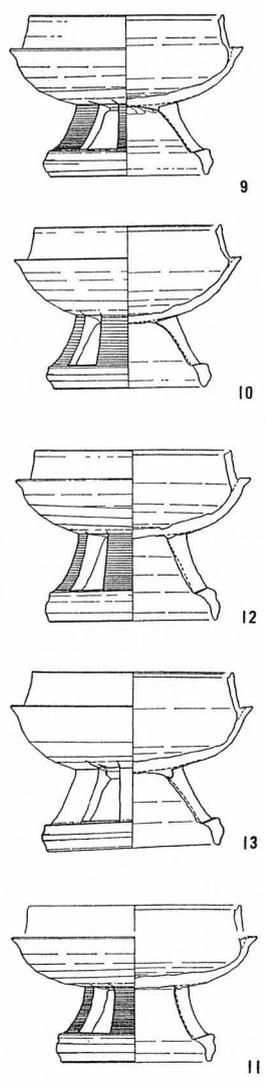
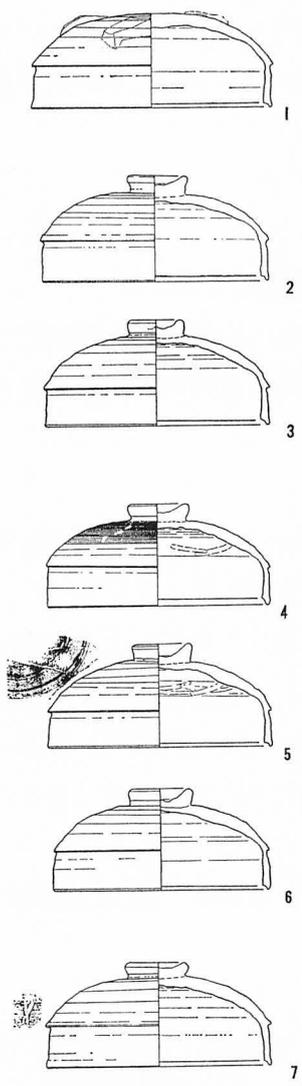
TK23



TK47



陶邑古窯址群出土・杯



伝・稲荷山古墳出土須恵器

第89図 出土須恵器の比較検討資料